

大典禅師『初學文談』—翻刻と注釈

国語科 篠崎 秀樹

ここに翻刻紹介する資料は、江戸時代寛政年間（一七八九—一八〇一）に刊行されたもので、糸大典の漢詩文に関する講義を弟子がまとめたノートである。題簽（外題）は「初學文談」、扉は「初學文譚」、内題は「初學文談」となっている。恐らくは「しょがくぶんだん」と濁つて読ませたものであろう。漢文の把握のしかた・考え方を啓発してくれる優れた漢文入門になつていて、要約を載せると長くなるので、直接に原典に当たつていただきたい。「初學ノタメニ文章ノ初步・詩道ノ大意ヲ説ク」（36丁表）とあるように、訓読の歴史から始まり、語論・文論・詩等、漢文の基本的理解に関わる全般的な事項についていかにも「碩学の小著」を思わせる奥行の深い議論が展開されている。特に助字の解説は有益であり、併せて昔の漢籍に見受けられる「意訳」タイプの漢文訓読への展望を与えてくれる。ただし、引用文が短く、趣旨を理解するには相当に困難を感じたので、背景を知るために今日のWEB環境を利用して国語科の教員に分かる範囲の注釈を施した。注釈は本文の後に掲載した。この作業を通してさまざまな漢籍に当たり、その意味でも非常に勉強になつた。何分誤りの少いことを願うが、おかしなところは批正をお願いする。

大典は、諱を顯常という。臨済宗の僧侶で、宗派では梅莊顯常を

正式名とし、糸顯常の意で竺常とも名乗つた。別号に淡海・小雲棲・北禅・蕉中等がある。近江国神崎郡伊庭郷（滋賀県神崎郡能登川町）の儒医今堀東庵の子太一郎が俗名だが、親交のあつた木村兼葭堂旧蔵の書簡集に権大納言園基勝の子とする記事がある由で、今堀家に里子に出されたものかともいう。京都五山の相国寺慈雲庵の独峰慈秀の許で出家得度、旁ら宇土士朗（宇野明霞）・大潮元皓に古文辞学派の漢学を学んだ。相国寺在住の壳茶翁とも交流があり（唯一の伝記『壳茶翁伝』をものす）、伊藤若冲を見出だし、木村兼葭堂の尊崇を受け、六如慈周・片山北海・篠崎三島・高芙蓉・葛子琴・池大雅等とも交際したという。京都相国寺・南禅寺の住持を歴任し、五山碩学・朝鮮修文職に任せられた。朝鮮修文職のことは、本書の序文にも見える。要するに江戸中期安永・天明頃の京都文苑における学者文人として屈指の人であった。本文の中には、師の明霞が中国語の原音で学ぶことを漢詩文学習の「正路」とし、和読を「捷径」と位置づけたという話が見え、当時の漢学者たちには白話を含め、原語に基づいた漢文理解が可能だつた人も意外に多かつたようだ。

漢文の提要・参考書類は、和刻の語法書に由来している。江連隆『漢文語法ハンドブック』（大修館書店 一九九七）は荻生徂徠『訓詁示蒙』『訳文筌蹄』、伊藤東涯『操觚字訣』『用字格』、皆川淇園『助字詳解』等を語法説明の根拠として引用するが、これらは当時の代表的な書籍だった。語法に特化した江戸期の和刻本を集めたものには、

吉川幸次郎・小島憲之・戸川芳郎編『漢語文典叢書』七巻（汲古書院一九七九／八一）がある。その第一巻に徂徠・東涯・淇園と名を並べて釈顕常の『詩語解』『文語解』『詩家推敲』を収めている。『詩語解』二巻、『文語解』五巻は、三十歳にして『明霞先生遺稿』八巻を編み、宇門の高足であつた大典が師の草稿に加筆上梓したもの、『詩家推敲』二巻はその姉妹編である。他に明霞の『唐詩集註』七巻を補充して刊行。自身の代表作には、『昨非集』一巻、『諸宗伝略』一巻、『世說鈔撮』四巻（他に『世說鈔撮補』二巻、『世說新語補鈔撮集成』一〇巻）、『唐詩解頤』七巻・補遺、『初學文軌』一巻、『學語編』一巻、『聯句式』一巻、『尺牘語式』三巻（下「尺牘寫式」）、『小雲棲稿』六巻、『小雲棲手簡』三編各二冊、『小雲棲詠物詩』一巻、『茶經詳説』二巻、『皇朝事苑』四巻、『北禪詩鈔』二巻（『昨非集』改題修訂）、『北禪詩草』六巻、『北禪文草』四巻、『北禪遺草』八巻等がある。さらに朝鮮通信使一行との応接の記録『萍遇錄』二巻が写本で伝わる。なお、著述目録一つでも今日になつては集めにくいためで、この機会に参考になる記事を拾うことにする。『初學文軌』巻末に「大典禪師著述目録」（寛政12年〔1800〕）があるが、本書刊行の翌享和元年（1801）に著者は八三歳で没している。この目録によれば、『小雲棲稿』は一二巻、『小雲棲手簡』は四編まで、『世説集成』は六巻（これと『補』『鈔撮』を合せて一〇巻となる）、『初學文軌』は三巻とあり（手許の同書は乾坤一巻仕立）、他に『四書越俎』四巻、『柿本人丸事跡考』一巻、『蛾眉山月圖説』一巻、『九族

稱呼圖』一幅、『初學文譚』一巻、『唐詩攝英』一巻、『杜律發揮』三巻、『唐詩礎續編』一巻、『拜説』一巻、『平安齋攸記』一巻、『金剛經三譯合本』一巻、『金剛經集解』一巻、『地藏本願經和解』一巻、『續文變』一巻等があり、『萍遇錄』『北禪禪語』『北禪法語』『北禪雜錄』等が「未刻」となつていて、このうち『拜説』は『大典禪師伽陀』一巻にも附録として収められている（但し、『北禪雜錄』は後出IRIZ DBに書目だけ挙げてある）。他には『離僧要訓』一巻があり、『歐蘇手簡』など大典が序文等を寄せたり、校閱・補足したりした書目もいくつもある。この他のもの若干は国立情報学研究所（NII）の大学図書館横断検索サービスであるCINii Booksで「顕常」と入力すれば拾うことができる。未刻の三部ほどは刊行されなかつた可能性がある。これらは著述の中でも代表的なものの電子テキストデータは、国会図書館、国文学研究資料館に少し、早稲田大学の「古典籍データベース」に割合多く収められている他、慶應大学所蔵本をGoogle Booksとして（画質は不問）電子化したものの一部が、現在は著作権の関係で、Hathi Trust Digital Library（米国図書館連合のリポジトリ）に収められ、制限付きながら公開されている。仏教関係ではINBUDS DBなる検索サービスもあるが、使い勝手はあまりよろしくない。花園大学IRIZ DBの禅書データベースや電子達磨が構築中である。

ところでなぜこの漢文典を翻刻したかについてだが、私の漢文語法への関心は、高校時代の『漢文学習小事典』（大修館書店）、『漢文提

要』（新塔社）等に始まるが、教員になつてから『漢文学習小事典』の著者による『漢文語法ハンドブック』を専門的参考書として見た時に、「学校教育における『漢文の語法』の解説書としては決定版になつた』（「はじめに」）と自負する著者の言葉に懽かつた。すでに『漢語文典叢書』の刊行がある中で、「資料」として引用する書目はなるほど他書とは一線を画していたが、それでもこれで「決定版」といわれるだろうかと思われた。もともと京都書房や中央図書など新版『国語便覧』が出始めていた学生時代に、それぞれの個性は感じながら、具体的にノートを取る段になると、いかにも似通つた解説の繰り返しに漠然と「他社の敷き写し」の印象を持つており、参考書に対する不平が拭えなかつたせいもある。学参などその程度のものと割り切つて使うだけ大人ではなかつたようだ。大典に关心を持ち始めたのは今世紀に入つてからで、WEB等から分かれる限りのデータを拾い集め、A3判一枚ほどのメモ書きにまとめて、「こんな人がいるんだ」と当時の同僚に渡したりしたこともあつた。その頃は『漢文エディタ』（紀要前号に紹介）の制作に大分のめり込んでいたから、序でに知つた名前だったのだろう。その後調査の糸は切れていたが、この人の名の古書がたまに出る度に手の届く範囲のものはぱつりぱつりと買い集めていた。そんな中でふと出会つたのがこの本である。『初學文軌』などは韓愈・柳宗元の中唐二大家の文章について、読解の勘所を注記の形で施したもので、要所ごとに必要最小限度の傍

註を施している。その手法の中に、訓詁注釈を宗とする学者顕常の面目が窺える。よく似た標題だが、『初學文譚』の方は門弟子への講義録である。あるいはその体裁をとつた漢詩文概論である。序文には「馬島之職」にあつたころ、余暇に二三子と語つた内容とある。それが好事家の手からふと書肆に持ち込まれたというのだが、間違いなく本人の手は全編に行きわたつてゐるはずである。大典が『萍遇録』を著したのは明和元年（1764）の頃で、朝鮮修文職に任せられたのが安永七年（1778）、対馬の以酌庵に天明元年（1781）から三年まで赴任している。享保四年（1719）生れの顕常の対馬在任は六十代初めのこととなる。『初學文譚』の序が「天明甲辰」（天明四年〔1784〕）、刊行が「寛政八丙辰」（1796）である。単なる注記にとどまらず、語りの調子をとどめながら、他書の序言・端書の中で展開するような議論をここでまとめて残しているところがユニークであり、正に漢文概論である。大典自身のまとまつた考えを述べたものとして貴重な一冊と考へる。古書としては時に出回るが、図書館で所蔵しているところは極めて少い。七十種以上の著述をした人にしてこの有様なのだから、漢文典の世界だけに限つても埋滅しかけている他作者の大著述はまだ多いことだろう。私は元来森鷗外の研究家の端くれだつたが、三好行雄のいう「漢文体の世界」への郷愁を鷗外の史伝は教えてくれた。読書家でないので郷愁は郷愁で終りそうだが、本書のようなガイドに出会つてぐいと一步押し出された。

〔凡例〕

- 原文の濁点の有無はそのままとした。一部、読みがなを施したところがある。
- 「」カッコで示したひらがなルビは入力によるものである。割注の中の原文ルビは「」カッコ内に入れて示した。白序の丁数は別に数えた。
- 熟語を示すための右傍線は省略した。《例》事情、日本紀、トシヤンケン
- カナの合字のうち「寸(時・トキ)」「ト(事・コト)」等はコード化されているのでそれを使い、「モ(トモ)」「モ(ドモ)」「ノ(シテ)」等は二字で記した。
- 原文では「得・況・達・解」等を「得・況・達・解」と表し、「勢」や「教」等は、各々「勢・勢」「教・教」など両様に表記している。これを特に尊重しなければならない意味も感じなかつたが、翻刻文でも文字の使い分けはそのままに示した。

〔内題〕

初學文談 全

〔外題(題簽)〕

初學文談

〔扉〕 大典禪師著／初學文譚／平安書林 京都市木屋町二條 貝葉書院
〔自序〕

〔さきに〕
鄉者吾在リシオ〔とき〕二馬島之職〔二〕也暇日与〔ため〕二二三子ノ談〔スレ〕文〔ヲ〕
二三子記シテ二其所ヲ一レ聞為〔テ〕二一小冊ト以〔お〕實〔ク〕二帳中〔一〕。〔この〕属〔ロ〕好
事ノ者以〔ニ〕其有〔ヲ〕一レ益〔ニ〕初學〔ニ〕私〔ニ〕授〔テ〕書肆〔ニ〕災〔ス〕木〔ニ〕焉既〔ニ〕成〔テ〕眎〔ス〕
レ余〔ニ〕〔一丁表〕余曰有レ是哉吾宿習ノ所レ熏〔スル〕非〔ニ〕我事〔ニ〕而事〔シ〕レ之
ヲ又以〔テ〕是〔ニ〕非〔ス〕人之所〔ヲ〕一レ事〔ト〕スル〔アラ〕母〔ニ〕乃〔スヤ〕尸〔ノ〕祝〔ノ〕代〔ル〕ニハ〔ニ〕庖〔人〕ニ乎雖〔モ〕
レ然リト外典也内典也流〔自〕中華〔ニ〕皆莫〔シ〕レ不〔「こと」〕〔ニ〕文字是〔ニ〕因〔一〕
丁裏〔〕不〔ハ〕レ因則〔已〕〔ヌ〕因〔ハ〕則不〔レ〕得〔レ〕明文不〔レ〕ハ〔レ〕明義不〔レ〕明故〔ニ〕曰文

者貫道之器ト不〔ニ〕其然〔一〕乎苟〔モ〕文以セハ〔ニ〕其道〔ヲ〕一非〔ニ〕徒〔文〕ニ也即〔チ〕宿習ノ所レ熏〔スル〕豈徒〔ニ〕菁華是逞〔セ〕ンヤ乎吾將〔下〕以〔ニ〕先覺〔ヲ〕一〔2丁表〕覺ント中後覺〔ヲ〕上也内外何ソ擇〔ン〕焉遂〔一〕事〔ハ〕不〔レ〕諫姑走〔シテ〕レ筆〔ヲ〕題〔シテ〕二其首〔ニ〕一與〔レ〕之〔ニ〕告〔トキ〕ニ天明甲辰〔三月〕竺〔常識〕〔〔竺〕常之印〕陽刻〔〔大典印〕陰刻〕〔2丁裏〕

ス漢音トイヒ吳音トイフモ其カタ少シ殘レリ 漢音ハ今イフ官話(クワンワア)ナリ吳音ハ今イフ杭州音(ハシウイ)
ニナリ 今華音ヲ以テ合セ按スルニ東冬陽庚ノ類トンヤンケントハヌ
ル韻ヲ皆 〔2丁表〕 トウヤウカウト唱工真寒先等ノハヌル音トワ力
チヌ緝治業等ノ入声ニフノ音ヲ付ルヲ以テミルニ其本ハ音ノ精キ「
推テ知ヘシ コレ華音ニ精キ 人ノ知コトナリ 然レハ往古文章ノ大意ハ和語ニテ譯シ字
句ノ精義ハ音讀ニテ修練スル者ナリ當時ノ文章四六ノ躰ヲ重トシ古
文ノ躰ハ能セザレトモ大體字句ノ義ハヨク明整ナルコト却テ近代ノ
〔2丁裏〕文ニ優レル「多シ天慶天曆ノ比ヨリ文學ノ道ヤ、衰ヘ遺唐
留學ノ人モヤミケレバ 音讀モスター次第三倭訓ニテ書ヲ讀ヤウニナ
リヲコト點ナド其比ヨリ起ルト見エタリ 今書籍ノ假名ヲ點トイ フハヲコト點ヨリナリ 和訓ニ
テ書ヲヨミ大概ニ文義ワカルル故ニソノ上ヲ精究スル「モナクマコ
ト、イヘハ信誠實真等ヲ混シアヤマルトイヘハ過誤 〔3丁表〕 謬錯
等ヲ混シ即便乃則輒等ヲ皆スナハチト訓シ也焉矣マタ乎哉耶歟等ノ
ワカチモ辨ゼズ字義スラ辨ゼザレバ 〔まし〕 况テ語句ノ顛倒錯置ヲヤ日本ノ
國裡ニ半華半倭ノ文ヲ書テ通用シ終ニハ中華ノ文字ヲ 〔もつ〕 用テ日本ノ
俗話トナス「今ノ書状ノ類ナリ因テ凡ノ名称二字ハ唐ニテ義ハ唐ニ
通ゼザル「十二九ナリ一一ニ改テ吟味セザレ 〔3丁裏〕 ハ識者トイ
ヘトモ覺エズ誤ル「多シ倭語ハ倭語華字ハ華字ト分レザル故ニ子細
ラシク名称ヲ呼テ文盲ナル」枚舉スルニ限ナシソノ本和訓ニテ書ヲ
ヨミ精究セザルヨリ起ルコレ初學ノ第一ニ心ヲツクベキ所ナリ
○倭訓ニテ書ヲ讀キタリ人々口ニモ熟シ耳ニモ慣タルユエ大概文義
ヨク通スル様ニナリタ 〔4丁表〕 レトモトクト推テミレハ和語ノ本
義ニモアラズ一種ノ讀書語トナリタル「多シ而則乃所以等ノ字ニア
テ、シカフシテ。スナワチ。トキンバ。ユエン。ナド、ヨメトモ倭
語ノ連續ニモカナハズ文字ノ義意ニモ當ラヌ「多シ其中ニハ展轉シ
テアヤマリ倭ノ本語ニモ非ルアリ如レ是ニシテ書籍ヲ解シ自己ニモ
文句ヲ綴ル「ナレバ 〔なほざり〕 等閑ニテ的正 〔4丁裏〕 ナラザルモコトハリ
ナリ
○今ノ學者音讀ノ正フシテ倭讀ノ正シカラザル「ヲ知トイヘトモ今
更華音ヲ學「モハナハダ難クタヒ學テモ日本人ノ心胷ナレバ華音
ノママニテ文字ヲ通解スル「ハ決シテナリ難シ故ニ今音讀ニテ學文
ヲ成就セント思ハ邯鄲ノ歩ヲ學ブタトエニ同シ且ク古來ノ倭讀ニ從
ヒ倭讀 〔5丁表〕 ノ盡サブル所ニ精彩ヲツケ文字ノ真面目ヲ見得ス
ル「學文ノ緊要ナリ但華音ヲ兼習フテ文學ノ助トナル「ハ甚多シ凡
テ字音ノ字義ニアヅカル「多ク又文句ノ脉絡節奏華音ヲ知ニ因テ發
明スル「多シ

○宇土朗方説ニ華音ハ正路ナリ倭讀ハ捷径ナリトイヘル至當ノ説ナ
リ喻ヘハ論語ノ賢賢易〔5丁裏〕色コレヲ鮮スルニ當ニ以レ賢ヲ為シ
賢ト以易フ其好レ色ヲ之心ニ此且從朱ト注スベキ所ヲ賢トシレ賢易ヨ
レ色ニト和訓ニヨミテソノ義自ワカル又徐禎卿力旅中ニ喪フレ女ヲノ詩
ニ生男不下堂生女弃中野コレヲ注セんニ縱ヒ是生モ二男子ヲ猶當ニ
不レ下サレ堂ヲ而撫ニ育ス之ヲ而ニ況生ニ女子ヲ而弃ルヤ中野ニ乎
ト數十字ヲ用ユベキ所ヲ生テモレ男ヲ不ルニ下サレ堂ヲ生テレ女弃ニ中野ニ
トワヅカノテニハヲ付テソノ義明ニ〔6丁表〕キコユ此ニヲ舉テ推
知ヘシ又亂政ノ二字ニ政之亂ル也。亂ル其政ヲ也。亂ハ治也謂レ治ル
ヲ其政ヲ也トニ義アレハ各註ヲ下シテ分ツ「ナルニ乱政乱レ政ヲ
乱ムレ政ヲト和讀ノ上ニテハ直ニ鮮スベシ此ミナ倭讀ノ捷径ナル所
ナリ捷径ノ益アル故ニ又害アリソノ故ハ賢賢易色ノ類古文ノ簡古ニ
シテ意味ソナワリタル句法ヲモ知リ又簡古ノ文脉ヲ學テ通ズル〔6
丁裏〕ト通ゼザルトノ工夫ヲモ着ベキ所ヲタゞ倭讀ニテ大概ニスマ
シ精シク會得スル「ナシ况ヤ詩語ハ格律音調ノ節奏アリテ含畜錯綜
ノ辭ヲ重トスレハ倭讀ニテ鮮スルハタゞ一往ノ意味ナリ古詩ヲ鮮ス
ルモ自己ニ作ルモ此旨ヲ會得セザレバ詩ノ佳境ニ入「能ハズ
○又倭訓ニテ讀レザル所アリ論語ノ先行其言〔7丁表〕而後從之ノ
文先ツ行テ其所ヲ一レ當ニキレ言而後其ノ言從之ノ意ナリ先行テ其
賢ト以易フ其好レ色ヲ之心ニ此且從朱ト注スベキ所ヲ賢トシレ賢易ヨ
レ色ニト和訓ニヨミテソノ義自ワカル又徐禎卿力旅中ニ喪フレ女ヲノ詩
ニ生男不下堂生女弃中野コレヲ注セんニ縱ヒ是生モ二男子ヲ猶當ニ
不レ下サレ堂ヲ而撫ニ育ス之ヲ而ニ況生ニ女子ヲ而弃ルヤ中野ニ乎
ト數十字ヲ用ユベキ所ヲ生テモレ男ヲ不ルニ下サレ堂ヲ生テレ女弃ニ中野ニ
トワヅカノテニハヲ付テソノ義明ニ〔6丁表〕キコユ此ニヲ舉テ推
知ヘシ又亂政ノ二字ニ政之亂ル也。亂ル其政ヲ也。亂ハ治也謂レ治ル
ヲ其政ヲ也トニ義アレハ各註ヲ下シテ分ツ「ナルニ乱政乱レ政ヲ
乱ムレ政ヲト和讀ノ上ニテハ直ニ鮮スベシ此ミナ倭讀ノ捷径ナル所
ナリ捷径ノ益アル故ニ又害アリソノ故ハ賢賢易色ノ類古文ノ簡古ニ
シテ意味ソナワリタル句法ヲモ知リ又簡古ノ文脉ヲ學テ通ズル〔6
丁裏〕ト通ゼザルトノ工夫ヲモ着ベキ所ヲタゞ倭讀ニテ大概ニスマ
シ精シク會得スル「ナシ况ヤ詩語ハ格律音調ノ節奏アリテ含畜錯綜
ノ辭ヲ重トスレハ倭讀ニテ鮮スルハタゞ一往ノ意味ナリ古詩ヲ鮮ス
ルモ自己ニ作ルモ此旨ヲ會得セザレバ詩ノ佳境ニ入「能ハズ
○又倭訓ニテ讀レザル所アリ論語ノ先行其言〔7丁表〕而後從之ノ
文先ツ行テ其所ヲ一レ當ニキレ言而後其ノ言從之ノ意ナリ先行テ其

言ヲ而シテ後從レ之ニト讀テモ盡サズ先シテ二行ヲ其言ヨリ一而後從レ之ニト
讀テモ盡サズ又文選ノ王命論ニ故ニ能為ニ鬼神一所ニ福饗セ天下ニ所ル
ニ帰往セコレ天下ノ上ニモ為ノ字ナケレバ讀ガタシ又蔡琰力胡笳ニ
無ニ日トシテ無夜トシテ兮不レ思ニ我鄉土ニコレ下ノ無ノ字ヲ除ザレバ
ヨマレズ此ミナ艱渢ノ文ニ非レトモ倭訓ニア〔7丁裏〕ツレバ難渢
ナル様ニ覺ユルナリ此類ニテ中華ノ文勢語脉ノチガヒアル「ヲヨク
會得スベシ讀レザル所ヲ看テ讀ル、所モ全ク盡サバル「ヲ知ベシ
右ハ一句ノ上ニ就テ言「ナリ一字ノ上ニテモヲシナメニ讀ヲツケテ
義ニ合ザル「多シ人々和讀ニテ習熟シ來レハ大概ニ鮮シ聞ユルヤウ
〔8丁表〕ニ覺ユレトモ推究ムレバ的切ニ知モノナシ姑ク一二ヲ
舉テイハド以ノ字華音ニテ以トヨミソノ以ニアマタノ意義アリアマ
タノ語勢アリ文語解ニ載ル所ノゴトシ然ルニヲシナメ以トヨミニテ
モツテノ義ニ合ザルモノ多シ甚フシテハ可ンニ以レ人ヲ而不ルレ如レ鳥
ニタモ乎ナド、大ニアヤマル〔可以二字ニテ語ヲナス以レ人ノ義ニ非ス〕又濟々タル多士文王以
寧シヲ四子講德ニ〔8丁裏〕濟々乎多士文王所以ニ寧シトアリ此等ニ
テモ考知ベシ〔所以コノユエト訓スレトモ是故ノ義トハ又別ナリ〕又為ノ字ニ諸義アル「亦文語解
ニ出スタメナスナル等ト訓ジテ盡ス「ニアラズ法華經ノ科註ニモ為
ノ諸義ヲ分釋セリ考見ルベシ〔タメノ義去声ニ分テトモ後世ノ「ニテ古文ニハ無
カリ又動ノ字語解ニ事必之辞ト釋ス此ニテ意義ヲ按ズベシ俚語ノイ

ツ 〔9丁表〕 デモノ義アリマタシテハノ義アリツヒト云義アリ因テ
ツ子ニ。スナハチ。ヤモスレバ。ノ三譯ヲ以テ畧ワカル然モ融
通シテ味ヒ知ベシ一語ヲアテ、片付ガタシ又與ノ字温太真與揚州
淮中ノ估客〔〕 橋蒲^ス與ニ輒不レ競^{カタツケ} 世コレ温力不レ競「ヲイフナレバ
トモニト讀テ聞エズ^{アフ辞ナリ} 又臨濟云與レ我過^シ二禪板^ヲ來レ龍牙
便過^{シテ}二禪板^ヲ一與^{ワタス}二臨濟^ニ碧岩^一本錄並^{上ノ}〔9丁裏〕 與ハニノ義ナリ下
ノ與ハアタフト讀トモ義ニ非ス通雅ニ以レ物予^{ルヲ}人ニ曰^レ過トトア
リ過渡ノ義ニシテ俚語ノワタスト云ニ同シ宮人手裡^{ヨリ}過^ス二茶湯^ヲ
ト云古句アリ^{ワタス}過^三禪板^ヲ於^ニ臨濟^一ト云意ナリ與於ソノ音アヒ近シ
文語解ニ此 義ヲ辨ス 此類ミナ倭訓ノ届ザル所ニシテ中華ノ音讀ニテハ自然ト
語脉通曉スル「ナリ推シテ考知ベシ 〔10丁表〕

○烟ヲケムリトノミ訓ズレドモキリカスミノ義ニ通ス霞ヲカスミト
訓スレトモカスミハ靄ナリ霞ハ日ノ餘光ヲ云洞霞飄^ス二素練^ヲ等ハ
雲ノ義ニ通ス風ヲフクカゼトノミオモヘドモ春風秋風風景風物風光
ミナ氣候ヲイフ「多シ凡テ氣象ノ動發スル所ニ就テ形容スルノ義ナ
リ故ニ人物ヲ称スルニモ風神風格風期風標等ト氣象ノ上ニ〔10丁裏〕
テイフ辞ナリ然ザレバ死物ヲ形容スルニナルナリ悲哀ノ字ヲカナシ
ム愁ノ字ヲウレフトノミ訓スルモ皆ツクサズ^{詩語解ノ題引}ニコレヲ辨ス 夫中華ノ
語義ハ多ク日本ノ語義ハ少シ故ニ此方ノ一語ヲ數字ニアテ或ハ數義

ニ混ズル「太^{〔はなはだ〕}オホシ然トモ事實ノ字義ハ考知ヤスシ虛字助語
ニ至テハ尤知ガタシ字書トイヘドモ大概ニ注スルノミ 〔11丁表〕
字ゴトニ一義アレバ某ハ々也ト注スレドモ直ニ同一ナルニハ非ス六
書故ニ凡文各^シ有レ義以レ彼ヲ喻^スレ此終^ニ不^ニ親切^{ナラ}一説文ニ依倚互^ニ相
釋^ス依^ハ倚^ハ也ト注シ又 此ノ類甚多シ取^二諸^ヲ近似^ニ而已トイヘリコノ故ニ
字書ニテ其近似ヲ考へ然^{シテ}後マタ細審ニ究明スベシ詩語解ノ題引ニ
六法ヲアグ其ノウチニ古語ヲツキ合セ比例シテ考知ルヨリ要ナルハ
ナシ故ニ文語解 〔11丁裏〕 詩語解トモニ古語ヲ引列シテ喻ス「ヲ重
トス典籍ヒロキ「ナレバ學者猶尚考索シテ各發明スベシ
○二字連用スル時語意轉ジテ一字ギリノ義ニ拘ザル「マタ多シ亦ハ
旁及之辭ト注スレトモ不亦ト連用スルトキ不^ニ亦君子^{ナラ}乎不^ニ亦惠
スレトモ而不^ニ一レ費乎ノ類^{〔かたがたおよぶ〕}旁^ニ及^ニノ義ニアヅカラズ古來無為ヲアジ
キナシ 〔12丁表〕 トヨミ不屑^ヲモノ^ヽカズトモセズトヨミ加之加以
至若ヲシカノミナラズトヨム皆コ^ヽロアル倭訓ナリ無為ハムヤクナ
リムヨウナリト云意不屑ハ心ニトンデヤクセヌ意ナリ加之加以至若
ハソノウエニマタト云意ニテ語勢下ヘカ^ヽリ穩順ニヨミガタキ故シ
カノミナラズト二字ニテ讀キルナリ又母寧母乃^{母無ト}通^ス亡其得無將
〔12丁裏〕 無將不一字ノ訓ハ各別ナレトモ二字連用シテ大抵同意ナ
リ故ニ綱目集覽ニ將無ハ猶下言^ニ無乃得無ト^一之類ノ上意以^ニ為是ト^一而

未^二敢^テ自主^{タラ}一也ト釋セリ大抵ミナ一ニテハアラズヤト婉曲ニイ
フ辞ナリ俚語ノ一ニテハアルマヒヤト云ニ同シ

天其以^レ礼悔^{マハ}レ禍スル^{「ヲ}レ于^レ許無^一寧茲^ノ許公復奉^{スル}「其社稷

ヲ^一左傳隱十一年正義^ニ無寧ハ々也ト注スレ^{アラ}モ母^{乃ト}同義ナリ左傳處々此語アリ^{アラ}スヤ

母^一乃^二大簡^{ナルニ}一乎^一語^一亡^一其言^レ臣^ヲ者將^タ賤^{シテ}而不^{トスルニ}一レ足

レ聽^ニ耶^{ハ猶^ニ亡^{乃ノ}也}籍^{スニ}レ人^ニ以^スレ此^ヲ得^レ無^{「ヲ}レ危^{「乎}同此^ノ君

小異^{ナリ}得^一無是^{ナルニ}一乎^一八^{世說}拍^{シテ}孟嘉^ヲ一曰、將^一無是^{ナルニ}一^同

如^ハレ此^ノ將^一無歸^一。同觀^{レハ}君^{カ所}二^レ言、將^一不早慧^{ナリシニ}

一乎^{後漢孔融傳}讀法ハ一定ナラザレトモ意義ハ畧同シ又得^レ無^{「ヲ}諸

君是其苗裔^{ナル}一乎^{世說}將^一無是^{ナルニ}一乎ノ類無一字ニテハ置レ

ザル所ナリ連用シテ語意ノ轉ズル「見ベシ」〔13丁裏〕

又不須不煩不勞不假ノ類本義各別ナレトモ二字連用スル時ミナ不用ノ意トナル

不^レ煩^二復尔^{「ヲ}一七^{世說}何^ソ假^シ南^二面^{スル}「ヲ百城^ニ一三^同若思^テ不^ハ

レ能^レ得^{「便不^レ勞^レ讀^{「ヲ}書^ヲ同}青史無^レ勞^レ數^{ルニ}趙張^ヲ一詩^{杜青}

春^{ニハ}不^レ假報^{ス「ヲ}黃牛^ニ同喬木若存^{セハ可^シヤ}レ假^レ花^ヲ同不須

ハ詩ニ多用ユ又不用不須モチヒズト讀トモ不^レ為ノ訓トナル所多シ〔14丁表〕

又不^レ悟不^レ意不^レ寤トモニ才モハザリキノ義ニ用ユ

不^キレ意永嘉之中復聞ントハ正始之音^ヲ世說九注ニハ不^キレ悟更ニ以為
ントハ^レ黨ト^{後漢范}不^キレ寤滄溟未^レ運波臣先蕩^{セントハ}文選

コノ類太多シ推テ考知ベシ然モマタ異中ニ同アリ同中ニ異アル「ヲ
知ベキナリ

○克ノ字ニヲサムノ義カツノ義ヨクスルノ義〔14丁裏〕須ノ字ニモ

チユルノ義モトムルノ義マツノ義コノ類ソノ文句ニツキ重ナル義ヲ

取テ和訓ヲツクレドモ華讀ニテハ須^{トヨミ}克^ケトヨミテ數義ヲ含^{オモ}

多シ此類マタ少カラズ倭讀ノツクサマル所ヲヨク辨別スベシ^{以ノ字}
二字ノ義ヲ帶^タルモノノ類ナリ

○聲音ハ先ニシテ文字ハ後ナリ故ニ字義ノ音ニアヅカル「尤多シ音
韻ヲ考ヘテ字義ヲシル」〔15丁表〕第一ノ工夫ナリ音同レハ義通ジ

音近レハ義近ク音轉ズレバ義轉ジ音反スレハ義モ反ス華音ヲ能セザ
ル人モ平仄清濁輕重緊緩等ノ音韻ニヨリテ輕重死活抑揚平險ノ語意

ヲ考知ベシ六書故ニ偏頗依倚聲義近^{シテ}而微^シレ不^レ同^ラ頗^ハ甚^クレ於リ
レ偏倚ハ力アリレ於リ依察シテ^ニ聲之廣狹輕重^ヲ一義可^レ知也トアリ胡惡何

曷焉安ノ類ミナ喉音ニシテ差別アリ乃載焉然ノ類〔15丁裏〕音異ニ
シテ韻同シ又也ト矣ト俱ニ喉音ニシテ也ハ意平ニシテ而盡^ク矣ハ意直ニ
シテ而疾シト注ス也^{エエ}ハ音ヒロク出ツ矣ハ音ホソク出ツ故ニ其義自然ト

響ニアラハル天地之道高也明也^ヰ庸道ハ則高矣美矣^孟二ノ語勢ミ

ルベシ耶ノ字也ノ音ニシテ平聲ナリ轉シテ決セザルノ辭トナル 平哉 ヨリ
ハ義 軽シ 焉ノ字同ク喉音ナレトモ平声ニシテ ヒキ 響異ナリ下ヨリウケノス
ル意 〔16丁表〕 アリ故ニコレヲコヽニコレヨリト訓スル「モ多シサ
レドモ之是等ノ字ヲ用ルトハ別アリ至テ于ニ應シレ天ニ順レ人ニ其揆
一ナリ焉 王命 論 先聖後聖其ノ揆一也ト同語同義ナレトモ音響別ナレハ
語勢モ別ナリ也焉矣ノ三モト明白ナレトモ倭人會得セズシテ但一句
ノ下ニ看合セテ置ヤウニ心得テ謬用ル「尤多シヨク工夫ヲ着ベシ助
辭ヲ置字ト呼ヲ以テソ 〔16丁裏〕 ノ等閑ナル「知ベシ
○凡助語ヲ用ルニコノ字ト定テ他字ハ用ユベカラザル所アリ又他字
ヲ用テ字義ハチガエトモ句意イヅレニテモ通ズル所アリ又意義ハ同
レトモ語勢ハ異ニシテハヅムトハヅマザルトアリ又古文ノ句ヲ用ユ
レトモ上下ノ語勢ニ因テ助字ヲカユベキ所アリ又文勢ヲ急ニセント
欲テアル 〔17丁表〕 ベキ助語モハブク所アリ文勢ヲ緩クセントシテ
無テモスム助語ヲ入ル所アリ又語句ノツリアヒニ因テ二字連用スル
所アリ 傳令使令俗語ノ 放教ノゴトシ 皆ヨク考ヘ知ベシコノ外古今ノ異アリ雅俗ノ
別アリヨク辨別スベシ文語解ニ大概ソノ例ヲ舉載タリ
○徂來ノ學則ニ吉備公ノ和訓ヲ作リシ「ヨイ 〔17丁裏〕 ヘリ證據モ
ナキ虚妄ナリ和訓ノ「上ニ言ルガ如シ近來字士新和訓ヲ改テ縁譯ト
名ケ文義ヲ考ヘ和語ヲ正シ經書ニ附ラレキ然ルニ世上舊來ノ倭讀ニ

口熟シ耳熟スル故却テ士新ノ譯ヲ奇僻ナリトシテ用ヒズ或ハ日本ノ
雅語ヲ害スナド、云テ詆ル者アリ此士新ノ本意ヲ知ズ文理ニクラキ
故ナリ中古以來一概ニ和訓ヲ混ジ而 〔18丁表〕 ハシカフシテ則ハス
ナワチ以ハモツテ其它ミナ此ノ通ニテ諸義ヲ辨別スル「ナシ故ニ士
新ノ縁譯華文ト倭語ヲツキアハセ其意義ヲ分理シテ喻ラシム初學工
夫ヲツクレバ文義ヲ發明スルノ利益オホシ取觀等ノラル將請等ノベ
シ使向等ノモシ况ノマシテ為ノヨル凡コノ類ミナ本義ニカナヘリ嘗
ノアリ今ノモシ本義ニハ非レトモ 〔18丁裏〕 嘗ハ過キ去リシ「ヲイフ
義ナレハ——セシ「アリト云義ニアタル 嘗ヲカツテト讀ノ訛 今ノ字設
テイフ辭モシ今有シ少卒暴ル起一子 呉文語解ニ委ク辨ス ノ類ミルベシ嘗ヲ有ノ義ニアテ
今ヲ若ノ義ニアツルニハ非ス縁譯トイヘトモ一々ニ的切ナルニ非レ
トモ舊讀ノ泛漫ナル二十倍シテ文義ヲ開發スルノ功ハナハダ多シ然
レトモ畢竟魚兔ヲ得ルノ筌蹄ナレバ必シモ 〔19丁表〕 讀法ヲ改ベシ
トハイハジ士新ノ學法モ古代ト同ク讀書ハ華音ト立ラレキ然トモ世
上ミナ音讀スル「能ザレハ倭讀ノ聲ニテ大概節奏モヨク口耳ニモ順
穩ニ吟誦ニモ佶屈ナラズ記憶ニモ便利ナルヲ要トスベシ文理ヲ知ニ
至テハ徂來ノイヘル口耳不レ用心ト與レ目謀思テ之又思フ神其通ゼンレ
之ニ誠ニ學文ノ格言ナリ 〔19丁裏〕

○ 曰 イハクイヘラクヲ切シテイ ノ玉ハクヨロシクスベカラクスベテクト云ハ後ニイフベキヲ前ニ
ハクトナリシナリ 曰 宜 須 イフ辭ナリオソラクウタガフラク子
カハククユラクノ類ミナ是ナリ曰フ「一ト」ヲ先イハクトイヒ須シ「一ト」イフヲ
先スベカラクトイフナリ須ノ字義ヲヨク考タルモノナリ今朝廷ノ文ニ宜須ノ字マヽアリ
テ皆カク讀「ナリ然ニ世上ニ須ク」クニタミツヒトアシキナシ
一トベシトカヘリ讀ハ文盲ナリ 國人罪人并ニ上ニ引ル無為ノ類ミナ
古代和訓ノコトバニシテ語意モ穩順ナリ中古ヨリ展轉シテアヤマリ
意義ニアタラヌ訓又多シ各考テ取捨ス [20丁表] ベシ

○ 助字ヲ用ル「ヨク常法ヲ知タル上ニテ活法アル」「ヲ知ベシ正法アル」「ヲ知ベシ始ク一二ヲ舉テイハゞ然レト

ル「ヲ知タル上ニテ奇法アル」「ヲ知ベシ姑ク一二ヲ舉テイハゞ然レト
モ而趙之地不シテ二歳危ラ一而民不二歳死セ一而シテ魏之地ハ歳危シテ而
民歳死スル者何也 魏 策此レ四ノ而ヲ連用シテ語意轉換セリ談者有二

悖テレ於目而拂ヒレ於耳謬テレ於心而便ナルレ於身者一或ハ有二悦シテ
於「20丁裏」レ目而順シレ於耳快シテ於心而毀レ於行者一非有先
而ノ字ヲ四語ニ配テ意ハ末語ニテ轉ズ而今ニシテ而後吾知レ免ノヲ夫語論
此上ノ而ハタゞ發聲下ハ而後ニ字ニテシテノ意ナリ 寸〔ヒキ〕後〔ヒチ〕ト
云義ハナキ「古書ニソノ例オホシ語」カバリ禮煩ナル則ハ乱ル事ル「モレ神ニ則難シ説君子不レ重則ハ不
レ威學モ則不レ固論」カラコレ礼煩則ハ亂ル礼煩則ハ事ル「モレ神ニ難君子不レ

重則ハ不レ威アラ不レ重則ハ學不レ固トイフ意ヲカク云ナリ實熟スル則ハ剥
シ則〔21丁表〕辱ス莊子二ノ則トモニ實熟ノ語ヲ承ルナリ此類ミナ活
法トイフベシ關石和鈞王府ニ則有リ五子之歌今是大鳥獸則失ヘハ其ノ群
匹ヲ越レ月ヲ踰テモレ時焉則必反巡シ過ニ其故鄉一云々 三年問何ソ可ン
祥大ナルハ一レ焉ヨリハ奇法ナリ左傳竊ニ為ニ先生ノ不レ取也トアルベキ

而モ適ス一乎 龜策傳コレ得テ而一ト云ト同語勢ナレトモ可 故ニ言フ二而非一レ
而ノ例ハスクナシ又倭讀ニテハ同様ニヨマレズ 命者ハ有ニ六蔽一焉尔
辨命論コレモ辞ヲユルメテ言而一ト置ナリ直下ニ音讀ス
二別ナル様ニオモハルナリ 家有レハ二千里驥而モ不 [21丁裏] レ珍トセ焉人懷ハ盈尺
ヲ一和氏而モ無レ貴矣 文選コレ家々人々二名馬名玉アラバ名馬名玉モ
ナリ此ノ外枚舉スベカラズ助語ニ限ラズ凡テ文字ヲ活用奇用スル
古文ニ太多ク莊子等ニハ尤多シ蘄シテ二乎而人ノ善スル「ヲ
而人ノ不「ヲ一レ善レ之」ノ類往々ニアリ考ベ「原文ママ」知ベシ近世古文
辭ノ風ハヤリ常法正法ヲ諳ゼズシテ奇変ノ語ヲ好テ用ル「跛」アシナエ者ノ
輕 [22丁表] 態ヲ學カコトシ笑ベシ戒ベシ

○ 文章ニ字法句法章法篇法ト云「アリ此ノ方和讀ノ敝ニテ句法ニク
ラク顛倒ヲ免レガタシ東涯ノ用字格初學ノ為ニ甚益アリ校看スベシ
顛倒ニ知ヤスキアリ知ガタキアリ雖ノ字所以ノ字ナド顛倒ナラズト
置テ却テ顛倒ナル「作者トイハル」人ニ多ク見ユ又不二我ヲ遇棄セ
人莫ニ之ヲ知「一〔22丁裏〕不レ恤二人之我ヲ欺「ヲ一不レ患ニ權之我ニ偏ル
」ノ類古來ノ文法ニテ倭讀ニテ却テ顛倒カト思ル「多シ又之ノ
字是ノ字ニテ上ニ置ベキ語ヲ下ヘ移ス「多シ論語ノ非シテニ夫ノ人之
為ニレ慟ヲ而誰ニ為ン為ノ字オモシ必シモタメト訓ズヘキニ非ス 荀子ノ文王之為子ミナ此義
ナリ又正法ト奇法トアリ不祥莫レ大ナルハ焉ヨリハ正法ナリ 孟子
祥大ナルハ一レ焉ヨリハ奇法ナリ左傳竊ニ為ニ先生ノ不レ取也トアルベキ

「23丁表」ヲ竊ニ不下為ニ先生ノ取上也 非有先 生論 トアリ山ノ者ハ不レ使レ
居川ニ不レ使ニ諸ノ者ヲシテ居ニ中原ニ礼 上下語ヲカエテイヘリ殊ニ
奇法ナリ然モ古文自然ノ奇ニシテ後世ヨリ法ト称スルナリ又今人ノ
手ヨリ出バ顛倒錯置カトオモハル、程ノ語アリ告ニ爾百姓ニ于ニ朕カ ホト
志一盤 北面シテ周公立リ焉 金 滕 子能必使ン三來年ニ秦ヲシテ之不二復攻レ
我ヲ乎 乎 平原 素ヨリ悍勇而輕シレ齊ヲ齊ヲ號シテ為レ怯ト 孫吳 此レ子三ノ者皆
出吾下ニ 世一朗 〔23丁裏〕 同 此類ナリ得ンレ無ニ諸君是其ノ苗裔ナル一
乎説 王之學レ華ヲ皆是形骸之外去コト之所ニ以更ニ遠キ 一書 同 コノ類
モ常語ノ例ニ非ズ吾有ニ羊上林ノ中ニ平隼 有ニ在ヲ含マセタルモノ
ナリ此類ミナ意ヲ着テ看ベシ等閑ニ摸倣スベカラズ

○日本人ノ文章ヲ學ニ語意脉絡ノ融通圓熟シガタキ所ハ論説ストモ
盡サジ但一字ノ上ニテモ 〔24丁表〕 意味ニカヽル「ヲ一二憶出スル
マヽニ此ニアグ夫如ナレハレ是ノ也為レ物甚衆ク為レ己甚寡シ 運命論本文
ニ就テ委ク ミル
ベシ コレ求ル所ノ財物ハ限ナクシテ己力受用ハ尽サヌ「ヲ論ズ物ハ
甚衆ク己ハ甚寡シト云テモ聞ユレドモ「ノ為ノ字ニテ意味ヲ備ル「看
ヘシ咫尺之内便覺フ 二萬里 ナル 〔24丁裏〕 遙世 コレ画圖ノ妙ナル「咫尺ヲ
萬里ノテイニスル意味ヲ為ノ字ニテ見セシムカヤウ 〔24丁裏〕 ノ處
等閑ニ讀テ文意ヲ盡サズ故ニ自己ニ書トキ辭トキ難シ古文ニモ一
字ニ意ヲ用ル「ヲ説テ夏小正ニ鷹則為レ鳩トノ下ニ善変シテ而之レ仁ニ

也故ニ其ノ言レ之也曰レ則ト盡スニ其辭ヲ也鳩為レ鷹ト變而之ニ不仁ニ也
故ニ不レ盡ニ其辭ヲ也トイヘリ此ハ一義ノ説ナレトモ總シテ一字一語
ニ穿鑿シ句ゴトニ 〔25丁表〕 吟味ストモ穩當ナル「ヲ得ガタシ唯ヨ
ク中華ノ文字ヲ習讀シ工夫ヲ用テ優柔厭飫スレバ自然ト融會スベシ
○春秋僖十六年ニ隕ニ石アリ于一レ宋五ツ公羊傳ニ曷為先ニ言レ隕ヲ而後ニ
言レ石ヲ隕石ハ記スレ聞ラ々ニ其ノ礪然タルヲ視レ之則ハ石察レ之ヲ則ハ五ト
アリ又左傳注ニ莊ノ七年ニ星隕テ如雨フル見ニ星之隕テ而墜ルヲ一レ於ニ四
遠ニ若ハ山若ハ水不レ見ニ在レ地之驗ヲ此ハ則見テニ在レ地之 〔25丁裏〕 驗
「一而不レ見ニ始メ隕ル之星ヲ」ト云リ此星隕ト隕石トノ語法ヲ明セリ又
夏小正ニ正月ニ雁北ニ鄉 〔むか 先ニ言レ雁ヲ而後言レ鄉ノ者ハ何也見レ雁ヲ而
シテ後數ルニ其鄉ヲ也九月ニ遷鴻雁アリ先ニ言レ遷ヲ而後ニ言ハニ鴻鴈ヲ何
也見レ遷ヲ而シテ後數ルレ之ヲ則ハ鴻鴈也コレモ同語法ナリ又古戰場文
ニ降セン矣哉終ニ一身ヲ夷狄ニ戰ハシ矣哉骨暴サンニ沙礫ニ終身ト云ハ熟
語ノマヽナリ下旬ハ戰死シテ骨サレルト云語ナリ又魚行ハ水濁リ鳥飛
ハ落ツ 〔26丁表〕 レ毛トイフ語アリ上ハ魚行水ト順語ナリ下ニ落毛ト
イヘルハ空ヨリ先ヲツル躰ミヘテ視レハ毛ナリ 亦毛落トア
ル處モアリ 此ノ類下
ス字ヲノ先後ヲ見ベシ中華ニテハ自然ノ語勢ナリ日本ニテハ順逆ニ
訓讀スルユヘ却テ工夫ノ着ザル「多シ

○日本人ノ文ヲ學フ「古今高卑ノ文脉ハ姑ラキ先中華ノ言語ニナリ得」切要ナリ中華ノ人〔26丁裏〕ハ文不文ニヨラズ日用ノ事實ヲ叙

ルニ天然自由ニヨク形状ヲ尽シ情由ヲノブル「此ノ方文章者トイハル、人ノ及トコロニ非ス秦漢古文ノ妙處ニ至ルニ比^{クラ}ブレハ難」ニ非レドモ學者ノ志浮虛ニシテ工夫着實ナラザル故ナリ古文今文雅文俗文ニヨラズ凡書籍ニ事實ヲ紀セル所ヲヨク看閱シソノ名称ソノ叙致ヲ委シク記憶シテ〔27丁表〕吾ガ筆端ノ援助トナス「ヲ要トスベシ

○前年朝鮮人ト接遇セシニ彼方ノ人ハ詩ヲ作ル「ナラヌ者モミゴト筆談ヲナス此方ノ人ハ大概詩ヲ能シテ朝鮮人ヘ贈ルホドノ者モ筆談ニ至テ一向マハラズ學文ノ初入チガヘル故ナリ日本ノ人才ハ詩道ニ近シテ學文トイヘバ先詩ヲ作ルヲ重トス故ニ大抵詩才ヲ具ルモノ一首ノ〔27丁裏〕詩ハ章ヲ成テ出セトモ題言スコシ長レハ拙陋ヲ免レズ具足セザル「耻ヘシ

○東坡ノ與^ル黃魯直^ニ書ニ凡人文字當^ニシ三務^テ使ニ平和^{ナラ}一至足之餘溢^テ為^ニ恠奇^ト一蓋出^ルレ於^レ不^レ得^レ已^{「ヲ}也トイヘリ此文ヲ學モノヽ要訓ナリ近世ノ文風菁華ヲ尚ヒ菁華ヨリ轉シテ奇巧ニワシル詩毛文モ情ノ條暢ヲ外ニシテ辭ノ結構ヲ重^{オモ}トス古詩盛唐ニ自然高妙〔28丁表〕ノ調アル「ヲ知ズ俚俗ニイフ道具ダテノ作意オホシ初心ヨリ道

具ダテノ作意ヲ重トスル者ハ詩モ文モ決シテ成就スル「能ハズ學者ノ病患フカク戒ムベシ

○凡ソ詩道ヲ學フモノハマヅ詩ハ聖人ノ一教ナル「ヲ知ベシ其ノ為リ

レ人也溫柔敦厚ナルハ詩ニテ教ル也トアリ溫ハ氣ノムツクリトシタル」

柔ハヤハラカ〔28丁裏〕ニシテギゴハナラザル「敦厚トモニアツシト訓シテ輕薄ナラザル「ナリコレ人情ニモトラズ礼義ニソムカザル

意味ニシテ實ニフカキ教旨ナリ凡ソ人トシテ無情ナルモノハナク其深ク厚キ「鳥獸ヨリ甚シ鳥獸ノ飲食ハ唯目ニフレ口ノヲヨブニ就ノ

ミ人ハ種々ニ其美ヲ好ミ品數ヲトリアツメ製法ヲ巧ニシ烹調ヲ考ヘ汁ニスヒク〔29丁表〕チ膾ニケンナド云テ膳部ノカサリ程限アル「

ナシ男女ノ上ニテモ^{サマヘ}様々ニ美麗ヲ好ミ色ニ惑ヒ情慾ニ溺ル、「鳥獸ノタゞ雌雄牝牡ノ意アルトハハルカニ異ナリ然モソレ故ニ又男女ノ

別ヲシリ不義ヲナサズ行儀ヲツヽシム「鳥獸トハルカニ異ナリ飲食ニヲゴル情アル故ニ又飲食ノ分量ヲシリ作法次第ノ礼ヲシル狗猫ノ

〔29丁裏〕淨穢ヲモ分タズ直ニ口ヲツケ鼠ノ直ニ牙ヲサシコムトハ遙ニ異ナリ是ヲ以テ人ノ鳥獸ヨリ情フカフシテ鳥獸ヨリ性タヽシキ「知ベシ聖人ノ教ハ性ノ正キニ帰スルヨリ外ハナシ就レ中詩ノ教ハ情ヲソダテ欲ヲヤブラズシテ道ビクノ理ナリ譬ハ父母ノ子ヲ教育スルニツヨク呵責スルノミニテハ却テヒガミクセヅク「アリ柔軟〔30

丁表）ノコトバニテタラシソダテマギラカシナドシテオトナシクスル理甚アル「ナリ故ニ歡樂ノ情ニテモ悲愁ノ情ニテモ酒色ノ興ニテモ詩歌ノ詞ニアラハシ咏吟ノ音ニ發スルトキハ自然ト優柔和暢シテ放蕩煩惱ノコヽロ移リ化スル「ナリ閑雎ハ哀而不レ傷樂而不レ淫トノ玉ヘルモコノ意味ナリ譬ハ飲食ヲ淨クトヽノヘ膳部ヲ飾〔30丁裏〕リソナユル時ハ鄙劣饗^{ムサボリック}ノ心オノヅカラ化シ佛神ヘモソナヘ賓客ヘモスヽメ氣象モ快クナル「自然ノ道理ナリ

○詩ハ性情ヲ述ル者也ト古ヨリイフ「ナリ性ハ生也ト訓シテ人ト生レテ人ラシキ心ヲイフナリ故ニ詩ハ實事實情ヲノブル「ナレトモ其人ニ相應セズ道理ニカナハザル實事實情ハ述ベカ〔31丁表〕ラズ然レバ喜ベキ道理ナラバ喜バヌ心ニテモ喜ノ辞ヲノベ哀ベキ道理ナラバ哀マヌ心ニテモ哀ノ辞ヲノブル「却テ性情ヲ述ルノ本旨ニカナフナリ此マタ詞ニアラハス所ニ於テ性情ヲタシナム一ノ教トナルベシ譬ハ僧ノ酒ヲ好モノモ詩中ニ酒ヲ飲「ライハザルハ不相應ノ性情ナレバナリ儒ノ佛法ヲキラフ者モ僧トマ〔31丁裏〕ジハリ寺院ニ遊トキハ方外ノ情ヲ詩中ニノブル「ハ詩ノ道ハ人情ニ順シテ見識議論ヲ立ル者ニ非レバナリカヤウノ處ニテ詩ノ道詩ノ教タル「ヲ知ベシ○詩三百一言以蔽^{サタム}レ之ヲ曰思無レ邪トノ玉ヘル邪ハ邪僻ノ義ニシテヒガミワルグセノ意ナリ宋儒ヨリシテ詩三百篇ヲ勸善懲惡ノ教トナ

スハ甚アヤ〔32丁表〕マレリ勸善懲惡ハ法刑ノ上ニアル「詩ノ教旨トハ大ニ別ナリ其ヨリシテ三百篇ト後世ノ詩トニ差別ヲナシ能言詞章ヲ無益ノ學ナリトイフ皆偏見ノ論ナリ

○今時ノ詩ヲ學ブ者タゞニ藝能トコヽロ工此ヲ以テ才學ニホコリ一時ノ名聞ニソナ工人ト唱和スルモタゞ勝負ヲアラソフ如ニオモヘリ〔32丁裏〕大ニ詩教ノ旨ヲ失フ又風雅ノ弊ヨリ放逸ヲ長ズル者多レハ能言詞章無益ノ學ナリトイフ咎メモ免ガタシ然トモ皆詩教ノ本旨ニ達セザル故ナリ

○三百篇ヨリ以來文運世態トウツリ終ニ唐詩ノ躰トナリ皆コノ躰ヲ重^{オモ}トス造語聲律ノ法ハ大ニ変ズレドモ溫柔敦厚風人ノ旨ハ異ナラズ晚〔33丁表〕唐ヨリ宋ニ至テ詩ノ趣向意巧ヲ主トナシ終ニハ議論見識ノ理ヲ詩ニアラハス様ニナリ詩教ノ本旨ヲ失ヘリ故ニ作者ハ唐ヲ尚ヒ唐ノ中ニ又盛唐ヲ尚フ「ナリ

○詩ニ體格風調韻ト云「アリ初學ノ者ソノ義ヲ會シガタク會ストイヘトモ解説シテ人ニ訓ユル「難シ故ニ此ニ大概ヲ言テコレヲ喻ス體ハ形〔33丁裏〕躰ナリ古詩ノ躰唐詩ノ躰又律ノ躰絶句ノ躰等トイフ其義シルベシ格ハ品格ノ義高下等ノ定リテクルワヌヲイフ人ニテ言ハ公家ハ公家ノ格大名ハ大名ノ格士大夫ハ士大夫ノ格アルガ如シ又道德才氣ノ上ニテモ人品ノケダカキ所ライフノ類ミナ格ノ義ナリ盛

唐之格格ノ高ハ似_二梅花_二等ノ語ミルベシ風ハ風流風儀ノ意公家ハ公
〔34丁表〕家ラシク大名ハ大名ラシキ所アルカ如シ古詩ノ風唐詩ノ
風宋元ノ風ト云ノ類ミナ觀察スペシ調ハ歌曲ノシラベ本音トノフ
ノ義ト相通ス和合也又揉伏也ト注ス揉伏ノ義ヨク思ベシ人ニテ言バ
行儀シトヤカニ俗ニイフ_{タキミ}置ザワリノ善ナリ詩ノ平仄聲律ミナ調ニ
カヽル其上ニ情意語辞ヨクトヽノヒ盛唐ノ語ラシク中晚ノ〔34丁裏〕
語ラシキハ皆調ナリ韻ハ音響ナリ本曲節ニ就テイフ義ナレトモスベ
テ趣味ノ「ニカヽル人ニテ言ハマジワリハナシナドスル上ニ情趣ア
ルガ如シ故ニ無風雅ナル人ヲ不韻トイフ古人ノ詩評ニ採_二菊_二東篱ノ
下ニ_二ヲ格高シトイヒ池塘生_二春草_二ヲ韻勝ルトイヘリ又書ノ評ニモ
文徵明ハ以_レ格_ヲ勝レ王履吉ハ以_レ韻_ヲ勝ルトイヒシ「アリ按知スペシ又
器物ヲ〔35丁表〕以テ譬_{メキ}ニ其々ノ道具トナルハ躰ナリ上品下品イ
ナカ細工京細工ナトイフハ格ナリ雅器ハ雅器俗器ハ俗器ラシキハ風
ナリ細工ノ能ユキト_{メキ}タルハ調ナリ物ズキノヨキハ韻ナリ凡テ細
工スル者モ目利スルモ此意ヲ會得セザレバナラヌ「詩ノ道モ亦カク
ノ如シ雅意ヲ會セザル者ノ細工ハ自然ト俗態ヲ免レズ詩道ヲ知〔35
丁裏〕ザル者ノ趣向ハ自然ト雅思ニカナハス此精細ニ稽古シ工夫ヲ
著ベキ所ナリ體格風調韻ヲ分テイヘバ右ノ如ナレトモ五ノ意義マタ
融通シテ看ベシ

右初學ノタメニ文章ノ初歩詩道ノ大意ヲ説ク此ヨリ以上ハ古人ノ評
論ニ存ス文章軌範初學ニ便アリ陳驥力文則ヨク古躰ヲ論ス其ノ它諸
家〔36丁表〕文法ヲ論ズルモノ太多シ惺窩先生採集シテ文章達德錄
ヲ著スソノ内性理家ノ論科場家ノ説混合シテ取ベカラザル「モ多レ
トモ一遍涉獵セバ初學ニ於テ益多シ王弇州力藝苑卮言詩文トモニ論
ス滄浪詩話元瑞詩箋ナド詩論ノ精當ナルモノ也詩ヲ學モノ第一ニ看
ベキナリ

文章軌範ニ放膽小心ノ二科ヲ立タリ王元美ノ〔36丁裏〕論ニモ文章
ノ枕巣不_レ過_二放膽小心ノ二端ニ_二何也文非_{レバ}ニ_二小心ニ_二識弗レ沈_{ナラ}也非_レ
ハ_二放膽ニ_二氣弗_{レバ}壯_{ナラ}也知ニ_二放膽小心之説_ヲ一則ハ文章家思過_{レバ}半ニ矣
トイヘリ文ノミニ非ス詩ニ於テモ此工夫アル「ナリ一句一字モ微細
ニ研尋スルハ小心ナリ全體ノ意向ヲ弘潤ニスルハ放膽ナリ書法ノ論
ニモ小心ニ布置シ大膽ニ落筆_ストイヘリ推シテ言ハ凡ノ事業大ニテモ
小ニテモ小心放〔37丁表〕膽ノニ_二ヲ具ユベキ「ナリ

寛政八_{丙辰}年〔京都市木屋町二條「貝葉書院製本部」朱印〕

〔37丁裏・卷尾〕

【出典調査】

※ 訓説が原文に記載されていない資料は任意に施した。

1丁裏

「善道真貞力」云々

二十〔日〕 丁西、散位從四位下善道ノ朝臣真貞卒^ス也。〔略〕真貞ハ以^テ三傳^{三禮}^{らい}。

ヲ^一爲^レ業ト。兼^{ネテ}能^{クス}二談論^ヲ。但シ舊來不^レ學^バ漢音^ヲ、不^レ辨^ゼ二字^{のみ}之四聲^ヲ。至^{リテハ}於^ニ教授^一、惣^テ用^{ユル}二世俗^{踏足}^{せきばく}〔踏駿^{しふんばく}〕之音^ヲ一耳。

情^ニ在^リ二進取^ニ、不^レ能^ハ二沉寥^{ちんれう}スル^下。比^ヒレ及^ブ二懸車^ニ、被^ルレ拜^セ二東宮學士^ニ。〔『続日本後紀』卷15 承和12年〔八四五〕2月〕 三伝は春秋左氏伝・公羊伝・穀梁伝、三礼は周礼・儀礼・礼記。漢音は前代嵯峨朝頃の新米音であり、旧音を吳音と称した。村岡良弼『続日本後紀纂詁』

卷15（近藤出版部 一九一二）所引本文「不學漢音」の割注には「職員

令^ニ大學^ノ音博士二人、掌^ル教^{フルコトヲ}音^ヲ。義解^ニ云^ク、明^ニ經^生ハ^ニ。

必^ズ先^ツ就^キ二音博士^ニ、讀^ミ五經^ノ音^ヲ、然^ル後^レ講^ズ義^ヲ。」とある。『続

日本後紀』原文は一本により踏を躊躇とし、莊子「其道踏駿」（雜篇・33天下）によつて「踏駿」（舛駿とも。乖舛駿雜の意。）と改めたとある（三上参次他『続日本後紀』〔六国史〕のうち 朝日新聞社 一九三〇）。また、前掲村岡本

には「踏駿」とし、割注に「玉篇^ニ、蹠駿。色雜^{リテ}不^レ同^ジカラ。御注孝經

序^ニ云^ク、近^日觀^ル二孝經^ヲ、舊注蹠駿尤^モ甚^シ。疏^ニ蹠^ハ乖^也、駿^ハ錯^也。」

とする。斑ら模様の意から純一でないと。沉寥は寂靜。学問に沈潜しない意か。懸車は七〇歳。善道は公羊伝の權威とされたと他の箇所にある。

5丁表 「邯鄲ノ歩ラ學ブタトエ」

且^ツ子^ハ獨^リ不^ルレ聞^カ三夫^ノ壽陵^ノ餘子^之學^{ビシゴトヲ}二行^ヲ於^ニ邯鄲^ニ與[。]未^ダシテ^レ得^ニ國能^ヲ、又失^フニ其^ノ故行^ヲ矣。直^ダ匍匐^{シテ}而歸^ル耳。〔『莊子』外篇・秋水〕

寿陵は燕の都。余子は丁年（成年）に満たない男子。燕国の若者が趙の邯鄲の都人士の歩行を真似ようとしてかえつて本来の歩き方も忘れ、這つて帰国した故事。趙の弁士（名家）の公孫龍が言語と觀察で莊子を真似ようとしたのを、それは井蛙の類であり邯鄲の歩を習うものだと魏公子に笑われた話。名家の惠施と公孫龍の主張はどちらも『莊子』に記録されているという。『莊子』には他に墨家の記録も残っている。

6丁表 「徐禎卿力旅中ニ喪フレ女ヲノ詩ニ」云々

徐禎卿（明）「隴頭流水歌 三疊 代^{リテ}内^ニ作」其一「隴水鳴咽^{シテ}流^ル、各自^リニ東西^ニ下^ル、生^{ミテモ}レ男^ヲ不^{ルニ}レ^下口^サレ堂^ヲ、生^{ミテ}レ女^ヲ棄^ツニ中野^ニ。」

（略）其三「隴水鳴^{ツテ}不^レ止^マ似^シレ聞^{クガ}ニ阿兒^ノ語^ヲ、出^{デテ}レ門^ヲ不^レ見^レ人^ヲ、肝腸斷^ニ絶^ス汝^ニ。」（徐禎卿『迪功集』卷一） 内は内人、妻。

7丁表 「論語ノ先行其言而後從之ノ文」

子貢問^フ「君子^ヲ。子曰^ク、先^ニレ行^ヒ。其^ノ言^ハ而^{シテ}後^ニ從^フト^レ之^ヲ。」（『論語』

為政）君子^ハ博^ク學^{ビテ}而^{シテ}辱^{サク}守^リレ之^ヲ。微^シ言^ヒ而^{シテ}篤^ク行^フ之^ヲ。行^ヒ

必^ズ先^チ、言^ハ必^ズ後^レ人^ニ。君子^ハ終^{フルマテ}身^ヲ守^リレ此^ヲ悒悒^{いぶいふ}タリ。〔前漢〕

戴德『大戴禮記』49「曾子立事」も同趣旨。悒悒は氣遣い、憂える貌。曾

子の言行は同書に載る。

7丁裏 「文選ノ王命論」 云々

帝王之祚^そ、必^ス有^リ明聖顯懿之德、豐功厚利、積累之業[。]然後、精誠通^ジ于神明^ニ、流澤加^{ハル}於生民^ニ。故^ニ能^ク爲^ル下鬼神^ノ所^ニ福[。]饗^{スル}、天下^ノ所^ト中[。]歸往^{スル}上[。]（班叔皮「班彪」「王命論一首」、『文選』卷52論^一） 祚^は位[。]福饗^は受納[。]班彪^は『漢書』の編者班固^の父[。]

7丁裏 「蔡琰力胡笳」 云々

無^二日^トシテ無夜^トシテ^ノ不^ルレ思^ハ我^ガ鄉土^ヲ、稟氣^含ミテ^レ生^ヲ今^莫シ^レ過^グ

ル^二我^ガ最苦^ニ。（略）（蔡琰『胡笳十八拍』其四） 蔡琰^は字文姬^{（昭姬）}。

『獨斷』の著者蔡邕^{の娘}。「胡笳十八拍」は匈奴に囚われた数奇な運命を歌つた長詩で、蔡琰の作とも後人の仮託ともいふ。稟氣^含生^は天地の氣を享けて生を得たものの意か。夜氣の意といわれるが、どうか。

8丁裏 「可^ン以^レ人^ヲ而不^ルレ如^レ鳥^{タモ}乎」

詩^ニ云^ク、邦畿千里、惟^レ民^ノ所^トレ止^マル。詩^ニ云^ク、縉蠻^{タル}黃鳥、止^マト^ニ于^丘隅^ニ。子曰^ク、於^テ止^マル^ニ知^ル其^ノ所^ヲレ止^マル。可^ン以^{テシテ}人^ヲ而不^ルレ如^カ鳥^タ乎[。]（『大學』） 「邦畿千里」以下『詩經』小雅「縉蠻」。「邦畿」は王城の周辺。

「縉蠻」は黃鳥^{（ウライ）}の鳴き声。「可以」は「足」に近い意か。

8丁裏 「濟々タル多士文王以寧シフ四子講德」 云々

濟々タル多士文王以寧^シ。（詩經・大雅「文王」） 「以^て・以^ニ」等と訓む。

か。「それで、そ（まさに）」といふ意で文意は通じるようである。「偃^一」^{ゆゑ}等と訓む。

匍^フ匐^フ乎^シ詩書之門^ニ、遊^ニ觀^シ乎^シ道德之域^ニ、咸^シ絜^{クシ}レ^シ身^ヲ修^メレ思^ヒ、吐^イテ^ニ情素^ヲ而^シ披^キ心腹^ヲ、各^々悉^シテ^ニ精銳^ヲ、以^テ貢^リ忠誠^ヲ、允^ニ願^フ下^ニ推^シ主^上弘^メテ^ニ風俗^ヲ、而^シ聘^セ中^ト太平^ヲ。濟濟タル乎多士、文王^ノ所^ニ以^{ナリ}寧^{ズル}也[。]（前漢・王子淵「王襄」「四子講德論一首」并序）、『文選』卷51論^一） 優息^は憩う。匍匐^ははらばう意で、遊觀とも対をなさないので衍字かといふ。濟濟^は優れた人材^が多数揃つて盛んな貌[。]「所以」を所以^ニ（まさに）等と訓めば、本書の趣意に近づく。

9丁表 「法華經ノ科註ニモ為^ノ諸義ヲ分釋セリ」

法華經科註^{とは}法華經の科^を掲げ、註^を施したものといふ。守倫^{（宋）}・徐行善^{（元）}・法濟^{（明）}・一如^{（明）}のものが現存する。「中華電子佛典教會」サイトに『科註妙法蓮華經』の全文電子データ^が載つてゐる。（http://www.cbeta.org/result/normal/X31/0607_001.htm）

前田慧雲編『大日本統藏經』卷137～143（藏經書院一九一）。

西義雄・玉城康四郎監修『新纂大日本統藏經』第31卷（国書刊行会一九八〇）。爲の諸義の詳細は未確認。

9丁裏 「温太真與^ニ揚州淮中^ノ估客^一櫓^一捕^ス與^ニ輒^不競^世說[」]

温太真（温嶠）位未^ダル^レ高^{カラ}時、屢^シ與^ニ揚州淮中^ノ估客^一櫓^一捕^シ、與^ニ

輒^{すなは}不^レ競^ハ。嘗^テ一過^{シテ}大^ニ輸^シレ物^ヲ、戯屈^{シテ}無^シレ因^レ得^{ルニ}レ、反^ル「トヲ。」
與^ヒ二庾亮^一善^ジ。於^テ二舫中^ニ大^ニ喚^ビテ亮^ヲ曰^ク、卿可^シ贖^フレ我^ヲ。庾<sup>即^チ送^ルレ直^ヲ。然^{シテ}後^得タリ^レ還^{ルヲ}。經^{ルコト}レ此^ヲ數回^{ナリ}。〔『世説新語』任^誕・第26話〕
※引用文は『世説新語補』（劉義慶〔宋〕撰・李贊〔卓吾〕批^{きくつ}）による。以下同じ。同書では卷一六所載。後の引用文について、本文における世説の卷数指定は『世説新語補』と一致する。ただし、依拠本は未詳。温太眞は東晋の將軍。佔客は商人。樗蒲は博奕。一過は一回の意という。輸物は負ける。戯屈は勝負に行き詰まり、缶詰にされた状態に甘んじることらしい。可^シとは受け出してほしいという意。本文にいう「かゝりあふ辭」とは「温のためには」の意か。</sup>

九一七)「接得」は受け取る意。『無門関』(第三七則「庭前ノ柏樹」)に「趙州因^{いかる}僧問^ス如何^カ是^レ祖師西來^ノ意ト。州云、庭前ノ柏樹子。」とある。柏樹^{はくじゆ}は栢^{びやくしん}。〔過す〕を「わたす(過渡の意)」と読めば、文意は明白となる。

〔本錄〕は『景德伝燈錄』を指すか。「僧問^ス如何^{ナルカ}是^レ西來^ノ意。師^{すなは}便^チ打^ツ。乃^チ云^ス、我^レ若^シ不^{レバ}レ打^タレ汝^ヲ、諸方笑^{ハシ}レ我^ヲ也。」(卷六)

『通雅』（明・方以智、首巻3巻・全52巻）は分類別の辞書。「漢典」
てい

文簡体字) の訳語の後に例文を二つ挙げている。〔[儒者は] 傳へ先師之業

9 丁裏 一臨濟云_レ我過_シ禪板_ミ二 云々
舉_ス、龍牙問_フ、翠微_ニ、如何_{ナルカ}是_レ祖師西來_ノ意。微_云タ、與_二我_ガ過_シ二

9丁裏 一臨濟云與レ我過シ禪板ヲ」云々
舉ス龍牙問フ翠微ニ、如何ナルカ是レ祖師西來ノ意。微云ク、與ニ我ガ過シ
禪板ヲ來レ。牙過シテ禪板ヲ、與ニ翠微ニ。微接得シテ、便チ打ツ。牙云ク、
打ツコトハ即チ任スレ打ツミ要スルニ且ツ無シトニ祖師西來ノ意。牙又問フ「臨濟」、
如何ナルカ是レ祖師西來ノ意ト。濟云ク、與ニ我ガ過シ蒲團ヲ來レ。牙取ツテ
蒲團ヲ一過ニ與ス臨濟ニ。濟接得シテ、便チ打ツ。牙云ク、打ツドハ即チ任スレ打ツミ
要スルニ且ツ無シトニ祖師西來ノ意。」（碧巖錄）第20則「龍牙西來無意」
龍牙は湖南の龍牙山の居禅師、翠微は京兆終南山の無學禅師。「拳す」
は提起する意か。「禪板」と云ふのは、坐禪をして居る時に疲を慰するため
に、一寸と倚りかかる所の板である。」（釈宗演『碧巖錄講話』 光融館 一

文簡体字)の訳語の後に例文を二つ挙げている。「(儒者は)傳へ先師之業ヲ、習ヒテ二口説ヲ以テ教フ。無シ下賃中之造思ノ定ムル然否ヲ」之論上。郵人「文書を伝達する役人・伝令」之過シ書ヲ、門者「守衛」之傳フル教ヘ也、封二定シテ書ヲ不レ遺サ、教審ニシテ令不ルレ遺サレ誤リ者ハ、則チ爲スレ善シト矣。傳(儒)者ハ傳ヘ學ヲ、不レ妄ニモ一言ヲ、先師ノ古語、到ルマレ今ニ具サニ也。」(『論衡』定賢) 「造思」は創見(思いを造すこと)。山田勝美『論衡』下(明治書院一九八四)には「過書」を過所の意とし、通行手形と訳す。「予モ亦謂フ之ヲ過スト。」辰州ノ人謂フ以テレ物ヲ予フルヲレ人ニ曰フ「過スト。」(通雅) 諸橋大漢和辞典には、「とる、一説に、服する。又、敗れる。」の訳を挙げ、『呂覽』(呂氏春秋) (論威)から「治亂・安危・過勝之所レ

在ル也。」を引用する。その注に「過ハ猶キレ取ルガ也。」とあり、また「張

本、取ルヲ作ル服スルニ。陶鴻慶云ク、取ルハ乃チ敗ル之誤ナリト。」（集釋）を引く。『呂氏春秋』の原文は「義ナル也者ハ萬事之起（紀とも）也。君臣・上下・親疎之所由起ル也、治亂・安危・過勝之所レ在ル也。過ニ勝スルハ之ニ、勿クレ求ムル於他ニ、必ズ反ル於己ニ。」（仲秋紀「論威」）であり、取は敗の誤字とも見える。説文解字には「過ハ度ル也。」とある。

10 丁表 「宮人手裡ヨリ過ス茶湯ヲト云古句アリ」

「延キレ英ヲ引クレ對碧衣郎、江硯宣毫各別床ニテリ。天子下シテ簾ヲ親ラ考試ス、宮人手裡ヨリ過ス茶湯ヲ。」（王建「宮詞」）一首は科挙の考試（殿試）の様子を歌う。碧衣郎は宮人か。江硯は紅硯とも。青州産の紅絲石で作つた硯という（〔宋〕姚寬『西溪叢語』）。宣毫は画仙紙の原型「宣紙」を産した宣城（安徽省）で作られた毛筆。注に「此ノ詩亦云フニ微之ノ作ト。」と。微之は元稹を指す。

10 丁裏 「洞霞飄スニ素練ヲ」

「曾テ入ル桃源ノ路、桃源信ニ少ナリレ雙ヒ。洞霞飄シニ素練ヲ、壁蘚画ク二陰窓ニ。古木疑フ、擇カトレ月ヲ、危峯欲ス、墮チントレ江。自ラ吟ジテ空シク向レ寂タルニ、誰ト与ニ倒ニセキ、秋缸ヲ。」（李質「得日觀東房」）洞は奥邃い意。霞は残照。素練は白い練り絹製の窓簾。蘚は苔。陰窓は北側の窓。僧房の内部か。擇は支える意。危峯は高く切り立つた山崖。

釣は酒甕。

11 丁裏 「六書故ニ凡文各有義以レ彼喻スレ此終ニ不ニ親切ナラ」云々『六書故』（卷八）「倚」の反切を示した後に、次のように記す。「説文ニ曰ク、依ハ倚也、倚ハ依也ト。按ズルニ、偏・頗、依・倚ハ聲・義各々相近クシテ、而微シレ不ルハレ同ジカラ。頗ハ甚シクニ於偏ヨリモ、倚ハ力アリニ於依ヨリモ。察シテニ其聲之輕重・廣狹ヲ、而義可キレ知ル也。凡ソ文ハ各々有リ義。以テレ彼喻スレ此ニ、終ニ不ニ親切ナラ。」説文ニ依・倚互ニ相釋ス、此ノ類甚ダ多シ。蓋シ無ケレバレ所レ取ルレ之ニ、姑ク取ルニ諸近似ニ一而已矣。依・倚・俯・仰之類、人ノ所ニ同ジク曉ル、不シテレ待タニ訓故ヲ而可キレ知ル也。」親切は深切、実際に即する意。

11 丁裏 「詩語解ノ題引ニ六法ヲアグ」

字ニ有リリク二六書一、各ニ發ス其ノ義ヲ。茲ニ不ニ復舉ゲ。今且ク就テ二語辭ニ一論ズレ之ヲ。凡ソ初學ノ者欲セバ、審ニモントニ字義ヲ、一ニ要スレ原カソコトヲニ字音ニ。即チ如キニ上ニ所ノレ云々、是レ也。ニニ要スレ審ニモントニ字形ヲ。如キニ忽・歛・謾・漫之類ノ、義通ジテ各ニ有ルハレ所レ从ニス、是レ也。三ニ要スレ推サンコトヲニ本義ヲ。如キニ都ハ以ニ國都之一治ナル一言也、總ハ以ニ束ネテレ絲ヲ而一縕ナル一言也、渾ハ以ニ水之渾テ不ルレ分カレ言フガ上、是レ也。四ニ要スレ思ハシコトヲニ反對ヲ。如キニ此ハ彼之反、是非之反ノ、是レ也。又如キニ始ハ與レ終對シ、初ハ與レ後對スルガ一、義各ニ可シレ見ル。五ニ要スレ及バシコトヲニ本音ニ。

復^二扶^一切^二有^リ反復^一重復^二切^一之意^一、更^二居^ミ古^一禁^二改^一之意^一、任^二如^一禁^二有^ル
照^中定^セセ^{コトヲ}之^ヲ上^一或^{イハ}同義^{ニシテ}而異例^一或^{イハ}異訓^{ニシテ}而同用^一或^{イハ}連
用^{シテ}而勢變^ジ、或^{イハ}訛傳^{シテ}而循用^ス加^{ユルニ}之^ヲ隨^{ツテ}二世代^ニ移換^{スル者}モ
亦多^シ。此^レ皆字書^一・韻書^二所^レ不^ル能^ク纖悉^セ一[、]今為^{メニ}初學^ノ示^ス隅^ハせ^つ
反之例^ヲ一[、]已[。]（『詩語解』題引）○○之切は反切^の指示[。]「加之」は大
典の読み。隅反は「子曰^ク、不^{レバ}レ憤^{ふん}セ不^レ啓^セ、不^{レバ}レ惟^ひセ不^レ發^セ。舉^{ゲテ}
二^一隅^ヲ不^{レバ}下^以二^三隅^ヲ反^セ、則^チ不^レ復^セ也。」（『論語』述而）
12 丁表 不^ニ亦惠^{スレモ}而不^ニ一^レ費^乎

子張問^{ヒテ}於^{孔子}曰^ク、何如^{ミハ}斯^ニ可^{キカ}以^テ從^フ一^レ政^ニ矣。子曰^ク、
尊^ビ五美^ヲ、屏^{ケバ}四惡^ヲ、斯^ニ可^シ以^テ從^フ一^レ政^ニ。子張曰^ク、何^ヲ可^謂
二^五美^ト。子曰^ク、君子^ハ惠^{シテ}而不^レ費^{ヤサ}、勞^{シテ}而不^レ怨^ミ、欲^{シテ}而不^レ
ト^一レ費^{ヤサ}。子曰^ク、因^{リテ}民之所^ニ一^レ利^{スル}而利^ス之^ヲ。斯^ニ不^ニ亦惠^{シテ}而不^レ
貪^ラ、泰^{シテ}而不^レ驕^ラ、威^{シテ}而不^レ猛^{ナラ}。子張曰^ク、何^ヲ可^謂二^五美^ト。子曰^ク、
不^{ルニ}一^レ費^{ヤサ}乎。〔以下略〕（『論語』堯^曰）「屏」は屏除[・]屏棄[。]

13 丁表 「綱目集覽」將無^ハ猶^下言^ニ無乃得無^ト之類^ノ上意以^ニ為是^ト
而未^ニ敢^テ自主^{タラ}也^ト釋セリ

阮宣子^{（阮修）}有^リ「令聞」。太尉王夷甫^{（王衍）}見^{エテ}而問^{ヒテ}曰^ク、老[・]
莊^ト與^ハ聖教^同ジキカ異^{ナルカ}。對^{ヒテ}曰^ク、將^ニ無^同ジキニ[。]〔宋〕朱熹集覽[、]

〔元〕 王幼学撰 『資治通鑑綱目集覽』 『世説新語箋疏』 せんそに以下のようにあるといふ。『黃生義府下』云ク、將一無トハ者、然リ而ウシテ未ダルニ、遽然タラ之辭ナリ。謝太傅(謝安)云ク、『將一無歸ル』下一(後出)。晉人ノ語度ノ舒緩ナル、類ネ如シレ此クノ。後人妄リニ意ヒ生ヒニ解る總由ホシレ不ルガレ悉クサ。當時ノ口語ナル耳。嘉錫案ズルニ、此レ與演繁露之説一合ス。義府は書名。未遽然は遽かに判断することを控える意。『演繁露續集卷五』云ク『不

シテ ただ
二 直 チニ云ハ 一レ 同ジト 而云フハ 三 將ニ 母ト 同ジキコト一 者、晉人ノ語度自ラ 翠ルル
也。庾亮辟シテ 二 孟嘉ヲ 一為ス 二從事ト。正旦ノ大會ニ 褚裒問フ 嘉何クニ 在ル
タ み もど ちよぼう いつ なから んや

ト。亮曰ク、「但自ラ覓メヨレ之ヲ。」袁歷觀シ指シテレ嘉ヲ曰ク、「將ニ母是ナル乎。」將母者ハ猶ホキレ言フガニ殆ンド是レ此ノ人ナリト一也。意ニ以ニ為ヘモ此ノ義也。」「王若虛ノ滹南遺老集ニ亦タ曰ク、『瞻ルニレ意ヲ蓋シ言同ジキ耳。將無ト云フハ者、猶ホ無乃、得無之類ナリ。苟晞ノ從母子求ムレ為ランコトヲレ將ト、晞拒ミテレ之ヲ曰ク、『吾不下以ニ王法ヲ一貸サ上レ人ニ、將ニ無後悔スルコトヲ』耶。』」この話は『晉書』に見える。「劉裕受禪ス。徐廣攀ジテ晉帝ノ

車二泣涕る。謝誨謂ヒテレ之ニ曰ク、『徐公得^二無小過^一。』皆是ノ類也。』

「嘉錫案ズルニ雅量篇ニ『謝太傅汎^{うか}ビテ^レ海^ニ戯^ル。風急^一浪猛^ニナリ。』公^{おもむろ}徐^ニ」

而未^ニ敢^テ自主^{タラ}一也ト釋セリ

阮宣子（阮修）有り二令聞一。太尉王夷甫（王衍）見三_二而問_一曰ク、老・莊ト與ハ_二聖教_一同ジキカ異ナルカ。對_二曰ク、將_一無同ジキニ_二。（〔宋〕朱熹集覽、

〔劉惔〕ニ曰ク、『安石〔謝安〕將〔無傷〕。』〔謝乃同載而歸。〕
並ニ可シ。與レ此互證トス。蓋シ將母者、自以爲如シ。而
レ欲セ直一言スルヲ之。委婉其辭、與レ人商榷スル之語也。』傷ふ
は負ける、商榷は物事の善し悪しを計る意。『王若虛曰ク、『蓋シ欲ス
三直二言セント其ノ同ジキヲ、而不ル必ズシモ疑ハ也。』』「方以智通雅卷五
曰ク、『將母、得亡、母乃ノ稱、皆發問之聲也。』」「韓詩外傳、『客見
二周公。』周公曰ク、『何以道旦。』曰ク、『入乎將母。』曰ク、『請
フ入ラン。』曰ク、『坐乎將母。』曰ク、『請坐せ。』曰ク、『疾言ハバ則翕翕
タリ、徐言ハ則不レ聞カ。』言乎將母。』翕翕はせかせかと慌てる意。

〔方言〔楊雄〕ニ『無寫、謂フ相見驩喜、有ル得亡之意也。』』「莊
子〔德充〕ニ子產曰ク、『子母乃ノ稱スル。』』「左氏用以テシ
轉語、莊・韓用キルニ以テス結句。』古人善摹一人之聲音・神狀
一如シ此ク。阮千里〔阮瞻〕曰ク、『將母同ジキコト。』本ト謂下得レ
母キヲ乃チ同ジキコト乎ト。猶シレ言ガ能ク母キ同ジキコト也ト。葉夢得
為シテ之ガ解曰ク、『本ト自ラ無クバ同ジキコト、何ニ因リテカ有ラン異ナムコト。』
此レハ是レ東坡ノ所謂『設ケテ械〔以テ應シ敵〕、匿シ形〔以テ備レ敗ル〕』、
〔審マバ則チ〕推シテ墮ツルニ滉漾〔河海〕ニ。』之伎倆耳。』東坡の引用
文はもと僧侶に対する批判の語。〔蘇軾文集〕卷12「中和勝相院記」

13 丁表 「天其以レ礼悔マハ禍スルレ于レ許無ニ寧茲ノ許公復奉スルニ

其社稷、左傳隱十一年正義、無寧ハ々也ト注スレ
若シ寡人得レ沒スルコト、于地ニ、天其レ以テ禮悔イバ
無寧茲ノ許公復奉スルノミナランヤ、其ノ社稷ヲ。(略)寡人之使ムルハ、
シテ處レ此ニ不唯ダ許國之爲ノミナラ、亦聊以テ固クセント吾ガ圉也。

圉は辺陲・国境。許の莊公を追放し弟に許国を襲がせた鄭伯の言葉。

13 丁表 「居レ簡ニ而行レ簡母ニ乃大簡ナル乎論語」

仲弓〔冉雍〕問、『子桑伯子。』子曰ク、可也、簡ナレバナリ。仲弓曰ク、居
レ敬ニ而行ヒ簡ヲ、以テ臨バ其ノ民ニ、不ニ亦可ナラ乎。居レ簡ニ而行スレ
簡ヲ無カラシ乃チ大簡ナル乎。子曰ク、雍之言然リ。(論語)雍也冉仲

弓が魯人子桑伯子の人物についてあまり大まかではあるまいかと懸念した話。「母乃(無乃)」を二字連用として解すべきことを大典は説く。

13 丁裏 「亡ニ其言レ臣ヲ者將タ賤シ而不ス
語之至レ者ハ、臣不三敢テ載セ之ヲ於書ニ。其ノ淺キ者ハ、又不レ足ラ
也。意ニ者臣愚ニシテ而不ルカ、闔ハ於王ノ心ニ耶。亡其言フレ臣ヲ者、將ニ
二賤シシテ而不ト一レ足ラ、聽ク耶。(戰國策)秦下・昭襄王下「范子因王稽入秦」
臣は范雎。語之至者は機密の話。注に「亡ニ其」は「亡乃」に同じ
とする。横田惟孝〔乾山〕『戰國策正解』に「むしろ」と傍訓を施す。

13 丁裏 「籍ニレ人以ス此得レ無「ヲ」危「乎」同
應侯謂ヒテ昭王ニ曰ク、亦聞ケル三恒思ニ有ルニ神叢ニ與。恒思ニ有リ
かん
13 丁表 「天其以レ礼悔マハ禍スルレ于レ許無ニ寧茲ノ許公復奉スルニ

年一。請ウテ二與レ叢博スルヲ一曰ク、吾勝タバレ叢ニ叢籍スコト二我ニ神ヲ二三日ナレ、不レバレ勝タレ叢ニ叢困シメヨレ我ヲ。乃チ左手モテ爲ニレ叢ノ投ジ、右手モテ自ラ爲スレ投ヲ。勝ツレ叢ニ叢籍スコト二其ノ神ヲ三日、叢往キテ求ムレ之ヲ。遂ニ弗レ歸サ。五日ニシテ而叢枯レ、七日ニシテ而叢亡ビヌ。今國ハ者、王之叢ナリ、勢ハ者王之神ナリ。籍スニ人ニ以テセバレ此ヲ得ンヤレ無キヲレ危キコト乎。（同前）應侯は范雎。恒思は地名。神叢は神祠の叢樹。叢と博奕を打つといふ不思議なたとえ話。神は神通力。悍惡な少年は有利な右手で賽を投げて勝利した。

13 丁裏 「此ノ君小異ナリ得ニ無是ナルニ一乎八」 →注記前出

武昌ノ孟嘉作リ二庾大尉ガ州ノ從事ト一、已ニ知ラル名ヲ。褚太傅有リニ知ルレ人鑒一。罷メテ二豫章ヲ一還リ、過ル二武昌ニ。問テレ庾曰ク、聞クニ孟從事ガ佳ナルヲ。今在リヤレ此不ニヤ、庾云ク、卿自ラ求メヨレ之ヲ。褚晤暎良ヤ久シクシテ、指シテ嘉ヲ曰ク、此ノ君小シク異ナリ。得ルレ無キコトヲレ是ナル乎。庾大ニ笑ヒテ曰ク、然リ。于レ時既ニ歎ジ二褚之默識ヲ、又欣ニ嘉ス之ガ見ルヲ一レ賞セ。（『世說新語』7 識鑒篇第16話、新語補卷8）大尉・太傅は三公の一。大尉は軍事を掌る。州は荊州。從事は州の刺史の属僚のうち、局長・部長クラスの汎称。褚太傅は褚裒。豫章は豫章の大守（長官）だつたこと。晤暎は顧晤。

13 丁裏 「拍シテニ孟嘉ヲ一曰、將ニ無是ナルニ一乎同」

同前話注に「嘉別傳ニ曰ク」として「袁歷觀久ウシテレ之ヲ指シテ嘉ヲ曰ク、將

二無是ナルニ一乎。」とある。別伝は『晋書』（卷98）桓溫傳附孟嘉傳か。

13 丁裏 「如ハ此ノ將ニ無帰一。」同 →注記前出

謝太傅（謝安）盤ニ桓東山ニ。時二與ニ孫興公（孫綽）諸人一汎テ海ニ戲る。風起リ浪涌々。孫・王（王羲之）諸人色並ニ遽テ、便チ唱テ使ムレ還ラ。太傅神情方ニ王ニ吟嘯シテ不レ言ハ。舟人以テニ公ノ貌閑ニ意説ブヲ、猶ホ去テ不レ止マ。既ニシテ風轉タ急ニ浪猛シ。諸人皆誼動シテ不レ坐セ。公徐ニ云ク、如キハレ此ノ將タ無ニヤレ歸ルコト。衆人即チ承テ響ヲ而回ル。於テ是ニ審ス。其ノ量ノ足ルヲ三以テ鎮ニ安スルニ朝野ヲ。（『世說新語』6 雅量篇第28話、『補

卷8）盤桓はふらふら歩き回る様。東山は会稽。王は旺（盛ん）の意。

「將無歸。」は「そろそろ帰ろうではないか。」の意。量は度量。

13 丁裏 「觀レハ君カ所ヲ一レ言、將ニ不早慧ナリシニ一乎」

融傳

煥（陳煥）曰ク、夫ノ人小ニシテ而聰了タリ。大ニシテハ未ダニ必ズシモ奇ナラ。融（孔

融）應ジテレ聲ニ曰ク、觀レハ二君ノ所ヲ一レ言マ。將ニ不早慧ナリシニ一乎。膺（李膺）

大ニ笑ヒテ曰ク、高明必ズ爲ランニ偉器。」（『後漢書』卷60「鄭太・孔融・荀彧

伝）孔融は孔子二十四代の裔孫という。名士李膺に面会するために

膺が老子（李耳）と同じ李姓なので縁があるといつて機智を働かせた。また、陳煥の批判に対してもさすがに逆手を取つた。高明は立派な人という意味で相手に対する尊称。『世說新語』（言語）にこの話を採る。

13 丁裏 「得ニ無ニ諸君是其苗裔ナルニ一乎」

世說

蔡洪赴クレ洛。洛中ノ人問ウテ曰ク、幕府初メテ開キ、羣公辟命アリ。求メニ英奇

「於仄陋^{そくろう}ニ、采^ル賢儕^ヲ於巖穴^ニ。君ハ吳楚^ノ之士、亡國^ノ之餘ナリ。有リテ何^ノ異才^ニ而應^{ズルト}斯^ノ舉^ニ。蔡答^テ曰^ク、夜光^ノ之珠、不^ニ必^{ズシモ}出^デ於孟津^ノ之河^{ヨリ}。盈握^ノ之璧不^ニ必^{ズシモ}采^ラ於崑崙^ノ之山^ニ。大禹^ハ生^レ於東夷^ニ、文王^ハ生^ル於西羌^ニ。賢聖^ノ所^レ出^{ヅル}、何^ソ必^{ズシモ}常處^{アラン}。昔武王伐^チ紂^ヲ遷^ス頑民^ヲ於洛邑^ニ。得^{ノヤレ}無^{キヲ}諸君^ハ是^レ其^ノ苗裔^ナ乎^ト。」（『世説新語』言語22、『補』卷3）幕府は齊王攸の政府。辟命は召見・任命。仄陋は僻陬の地・片田舎。夜光之珠は隋侯に命を助けられた蛇が報恩のために齎した明月の珠。夜も昼の^ハとく、隋珠と呼ばれた。盈握は掌一杯の璧。大禹は諸^侯（山東省）出身である舜（『孟子』離婁下）の誤りといふ。武王の話は『尚書』（多士）。またこの対話は華令思（譚）と王武子（濟）の問答（『晋書』）の穿鑿剽竊であるといふ。

14 丁表 「不^レ煩^ニ復尔^ヲ 世説^七」

羅君章（羅含）曾^テ在^リ二人^ノ家^ニ。主人令^{ムルニ}下^レ與^ニ坐^上ノ客^一共^ニ語^ラ上[、]答^テ曰^ク、相識已^ニ多^シ。不^レ煩^{ハサ}復^タ爾^{スル}。」（『世説新語』5方正篇第56話、『補』卷7）

14 丁表 「若思^テ不^ハ能^レ渴[「]便^レ勞^レ讀[「]書^ヲ 同[」]」

宋の劉義慶原撰といふ『世説新語』（文学96）に対して明の王世貞が敷衍した補説（『世説新語補』卷6）の注記に『齊書』を引用する。本文は、その注記からの引用と一致するが、後述のように（24丁表）大典が據つた

書に載る段が李卓吾批点『世説新語補』には見られない。依拠本は別にあるか。「齊書」曰^ク、劭^ガ妻^ノ弟李節^モ亦才學之士ナリ。謂^フ劭^ニ思^{ヒテ}不^{レバ}能^ハ得^ル。不^レ勞^セ讀^{ムコトヲ}。」『齊書』とは『北齊書』を指す（列伝第28邢邵伝）。李節の言葉は、邢邵の「誤書モ思^ハ之ヲ、更^ニ是^レ一適ナリ。」の語に對するものである。『世説新語補』原文の訓点は「若^モ思^テ不^カレ能^レ得^ル。便^不勞^セ讀^レ書。」であり、これでは文意が通じない。既成のテキストをその訓読で一新する。そういう箇所を大典は例に挙げる。

14 丁表 「青史無^レ勞^レ數^ルニ趙張^ヲ 詩[」]

秋日野亭千橘^ノ香。玉盤錦席高雲涼^シ。主人送^ル客^ヲ何^ノ所^ゾレ作^る。行^リレ酒^ヲ賦^{シテ}詩^ヲ殊^ニ未^ダ央^キ。衰老^{應^ニ}シ^レ為^ス難^シト^ニ離別^シ、賢聲此^ヲ去^{マサ}。有^リ輝光^一。預傳籍^{タリ}新京尹^ニ。青史無^シ勞^{スル}數^{フル}ニ趙張^ヲ。」（杜甫「章梓州^ノ橘亭餞^ル成都^ノ竇少尹^ニ」（得^ニ涼^ノ字^ヲ））、「全唐詩」卷227）章梓州は章彝。趙張は前漢の京兆尹の趙廣漢・張敞。行酒は獻酬。

14 丁表 「青春^{ニハ}不^レ假報^スニ黃牛^ニ 同[」]

汝迎^テ妻子^ヲ達^ス荊州^ニ。消息真^ニ傳^{ハリテ}解^ク我^ガ憂^{ヒラ}。鴻雁影來^ル連峽^ノ内、鶴鵠飛^{ゴトク}急^到沙頭^ニ。嶠^ニ關險路今^ヲ虛^シ遠^ク、禹^ノ鑿^{リシ}寒江正^ニ穩^カ流^ル。朱紱即^チ當^ニ隨^フ彩鷗^ニ、青春^{ニハ}不^レ假報^{スル}。」（下略）（「舍弟觀赴^キ藍田^ニ取^テ妻子^ヲ到^ル江陵^ニ。喜^{ヒテ}寄^ニ三首^ヲ」）

「。」『宋本杜工部集』卷16、『全唐詩』卷231） 舍弟は異母弟杜觀。妻子は妻の意。鳴鳥は兄弟の餘えるべし。堯闢は藍田県南の雅所。未成

は天子が大夫に下賜する印綬。杜甫自身を言う。彩鷁は船。黃牛は湖北西陵峽付近の灘の名。だん 尾聯は来春三峡を穿つて洛陽に向かう意。

14 丁表 「喬木若存セハ可ニヤレ假レ花ヲ 同
ゆしん 言
らがん 言
ヨリ 二百
三二
季衣リ火ニリテ年

庚信・羅含俱ニ有リレ宅ニ春來リ秋去リテ作ル誰ガ家ト。短牆若シ在ラバ從ハレ殘スニレ草ヲ喬木如シ存セバ可シヤレ假ルレ花ヲ。ト築應ニシレ同ニス蔣詡ノ徑。
為園須ラクシレ似ス邵平ノ瓜。比年病酒開カンニ涓滴ヲ、弟勸メ兄酬ユソ怨ミ
嗟カ。 (承前、第三首) 庚信・羅含は共に嘗て江陵に住んだ文人。蔣詡

の徑とは、漢の蔣詡が庭に三つの徑を作り、松・菊・竹を植えた故事から
隠者の庭の意。邵平の瓜とは、秦の東陵公邵平が秦の滅亡後長安城東で
瓜を育てて売り、東陵の瓜と言わんとする故事。比平は近平。肩滴よひレ秉。

14 丁裏
「不キ」意永嘉之中復聞ノトハニ正始之音ヲ
世説九注ニハ不語ニ作ル

王敦爲^リ二大將軍ト、鎮^ス豫章^ニ。衛玠避^ケレ亂^ヲ、從^リレ洛投^ズレ敦^ニ。相

見テ欣然タリ。談話シテ彌爾レ日ヲ。于レ時謝鯤爲リ二長吏一。敦謂テレ鯤ニ曰ク、

不リキレ意ハ永嘉之中、復タ聞カントハ二正始之音ヲ一。阿平若シ在ラバ、ベ當ニシ二復

『世說新語』賞譽51、「補」卷9)「正始之音」とは、魏の正始二年(248)から二年後(251)にかけて、嵇康(さいきょう)、向秀(こうしゅ)、郭象(くわう)らが作曲した樂曲の総称である。

始年間頃（三世紀半ば）の何晏・王弼らによる清談を指す。阿平は王澄。

王澄は人に屈しない才人だったが、衛玠の言葉にはいつも感歎絶倒した

といふ。(二)では衛玠と謝鯤の清談を指す。注には「別傳曰々」として「不_キレ悟」とする。別伝は『晋書』(卷36・列傳6)衛玠伝。

14 丁裏 「不キレ悟更以以為ントハレ黨トノ不キレ寤滄溟未レ運波臣先蕩セントハ
滂對^{ハテ}曰ク、臣聞^ク仲尼之言^ヲ。見^{テハ}レ善^ヲ如クシレ不ルガレ及バ、見^{テハ}レ惡^ヲ

如クスレ探ルガレ湯ヲ。探ルトハ湯ヲ汲ム。二去り疾ニ也。見ユ二論語ニ。欲スレ使メント下善トシテレ善ニシニ其ノ謂フ。三枚ニ所ヲ頃フ。聞クヲ。ベリ

清一悪レ惡同中其河上詔ニ王政之所一レ原レ閑キレ悟更ニ以テ爲サントハナト。甫曰ク、卿ハ更ニ相拔譽シ、迭ニ爲リニ脣齒。有レバレ不ルレ合ハ者、見ルニ則チ排斥セ。其ノ意如何。○劉放曰ク、見則ハ按スルレすなは乃チ慷慨シ仰イデレ天ヲ曰ク、古之循したがフモチハレ善ニ自ラ求ムニ多福ヲ。今之循フモノハ皆ニ才おもいタルク。劉放曰ク、按スルニレ文ヲ循身ヒスルニ日、頃ハクハリメヨ

善身陷二大膠一。皆當二レ作ル脩二。身死之曰廟地二。於首陽山ノ側二。首陽山ニ見二史記ニ。首陽山ハ在二洛陽ノ東北二。上不レ負カ二皇天ニ。下不レ愧チ二夷齊ニ。伯夷。叔齊。甫愍然トシテ爲メニレ之ガ改ムレ容ニ。乃チ得タリ並ニ解カ。乃二死セルコト。兩種桔一。鄭玄注シテ二周禮ニ曰ク。木ノ在ルレ。足曰レ桿ト。在ルレ手ニ曰アト桔ト。〔後漢書〕卷57。黨錮傳。范滂。

（の項） 甫は中常侍の王甫。脣齒は密接な利害関係にあること。「不悟」

は「不料」（料らず）の意ともいう。改容は顔付き・態度を改めること。

不リキ
レ寤ハ滄溟未ダ
ルニレ運ラ波臣自ラ蕩リ、渤海方ニ春ニシテ、旅翮先ヅ謝

セント♪
〔文選〕卷40 謝玄暉〔謝朓〕「拜_{セラレ}中軍記室_ニ、辭_{スル}隋王_ニ牋_」」

滄溟・渤海は大海。波臣は海の使者、『莊子』の語。旅翮は鴻雁の羽。

謝朓が隋王に心なからず別れる名残の情を述べた文といふ。

謝朓が隋王に心なからず別れる名残の情を述べた文といふ。

「六書故」偏頗依倚聲義近シテ而微シ〔レ〕不レ同ラ頗ハ甚クレ於リヨ

『講孟箇記』序の冒頭に、「道^ハ高^シ矣、美^シ矣、約^は也、近^は也。人徒^{いたづ}ラ見^ミ」

偏倚ハ力アリ
レ於リレ依察シテ
一聲之廣狹輕重ヲ
一義可知也」

16 丁表 「天地之道高也明也
庸」

誠ハ者自ラ成ス也。而シテ道ハ自ラ道ク也。誠ハ者物之終始ナリ、不レバレ誠ナラ無シ物。是ノ故ニ君子ハ誠ニスルヲレ之ヲ爲スレ貴シト。誠ハ者非ザルニ自ラ成スノミニレ。

己^ラ而^リ已^一也^一、所^ニ以^ニ成^スレ物^ラ也^一。成^スレ己^ラ仁^也、成^スレ物^ラ知^也、性^之

故ニ至誠ハ無シ。息ハ不レバ、息マ則チ久シ。久シケレバ、則チ徴アリ。徴アレバ、則チ悠遠ナリ。悠遠ナレバ、則チ博厚ナリ。博厚ナレバ、則チ高明ナリ。博厚ハ所ニ以載スル一レ物ナリ。

高也、明也、悠也、久也。（略）詩云ク、維レ天ノ命、於穆トシテ不レ已。蓋シ曰フ三天之所ニ以爲ルレ天也。（下略）右第二十六章「穆トシテ」は高遠な貌。

16 丁表 「道」則高矣美矣

公孫丑曰、道ハ則チ高シ矣、美シ。宜シクシニ若クレ登ルガレ天二然ル。似タリレ不ルニレ可カラレ及ブ也。何ゾ不ルトレ使メ下彼ヲシテ爲ラ中可クシテニ幾ド及ブ、而曰、
「孳孳」は「孜孜」に同じ。吉田松陰

17 丁裏 「徂來ノ學則ニ舌備公ノ和訓ヲ作りシ「ヲイヘリ」

『講孟劄記』序の冒頭に、「道高シ矣、美^{うるは}シ矣、約也、近也。人徒^{いたう}見^{うけ}其ノ高ク且^かツ美シキヲ^一、以^テ爲^ス不^トレ可^{カラ}レ及^ブ。而モ不^ルレ知^ラニ^{シテ}其ノ約^{ニシテ}近ク、甚^ダ可^{キコトヲ}一レ親^{シム}也。富貴貧賤、安樂艱難、千百變^{スルモ}ニ^{シテ}乎前^一、而モ我待^{ツコト}レ之ヲ如^ク、居^{ルコト}レ之ニ如^シレ忘^{レタルガ}。豈^あニ^{シテ}非^{ズヤ}約^{ニシテ}一、而モ我待^{ツコト}レ之ヲ如^ク、居^{ルコト}レ之ニ如^シレ忘^{レタルガ}。豈^あニ^{シテ}非^{ズヤ}約^{ニシテ}

(『徂徠先生學則』學則二) 吉備氏は原文「黃備氏」。錯綜は互いに組み合わせること。「侏離缺舌」は原文「侏離 鵠舌」を作る。海表は海外。吉備真備は孫子の兵法にも通じていたところから兵法好きの荻生徂徠が関心を寄せていたのではないか。カタカナの発明者に擬せられているが大典の指摘の通り、俗説であるといわれる。

18 丁表 「近來宇士新和訓ヲ改テ縁譯ト名ケ、經書ニ附ラレキ」

「縁譯」の語を載せた典拠未詳。ただし、『文語解』や『詩語解』の例言に宇士新(宇野明霞)の訳法の獨創性について言及がある。「請に須の義あり、好に宜の義あり、使に若の義あり。皆本義より轉ず。庶よ幾にちかし、儻にもしくは義あるよりしてねがふ辭となる。今の字いまと云よりして發端の辭となり、又轉じてもしの義となる。今有レ璞ニ玉於レ此の類はもしいまの義となれども、今有ニ少卒暴ニ起レ」の類(→後出 19表)はもしの義のみにしていまの意はなし。凡字義の展轉する「多くこの類にして字書訓詁のつくす所には必ず。學者舊來の倭讀に泥て義意にくらき多し。士新の譯法あに千古の發明ならずや。」(『文語解』凡例)

古來かつてと譯すれども本義に非ず。この字會と同訓なり。然に會の字に曾不會無と用る一義あり。此かつての譯にあたる。因て誤て會嘗ともに右の經るの義を混じすべてかつてと譯したるものなり。會にはかつてと經る義との二訓あり。嘗の字は經る義のみなり。然るに六朝に至て嘗不嘗無の語あり。これ會嘗同訓(同音カ)ある故に會不會無の義までを混じて嘗不嘗無と用るなり。古文の法には無「」なり。中華すら時代によりて嘗不嘗無と用るなり。古代の書をみれば、この訓詁を謬り来れば、倭譯の訛轉はことほりなり。古代の書をみれば、この字むかしと譯せり。此かつてといふより好れども文によりてむかしと云程になき所あり。凡そ既往の事を話にかうへしたる「ありしといふ。」の字ありしと云辭にあたる。吾嘗ニ終日不レ食終夜不レ寐以思一語。これ既往一時の「」をいへば、ありしにてよく通ずれども、既往平生の「」をいふ辭にも嘗を用れば、ありしの譯文あたらず。呂尚蓋嘗窮困シ年老タリ矣齊世。吾騎ニ此ノ馬ニ五歳、所レ當無敵嘗一日ニ行千里。これ平生をいふ辭なり。畢竟この字に的當する倭語なし。世上に皆かつてと讀て経る義を解し来れば其にまかすべし。會嘗に二訓あれば倭語のかつてにも二義ありと謂て了すべし。(略)(『文語解』卷1) ※原文漢字カナ交り文。

19 丁表 「嘗ハ過キ去リン」「ヲイフ義ナレハーセシ」「アリト云義ニアタル 詞ヲカツテ讀(訛)文語解ニ委ク辨ス」

嘗かつて通じて作常の字元來なむると云義なり。なむるは我口を経たるなり。其より轉じて凡そ耳目身心に経たる「をいふ辭となる。

於阨ヨリ、以テレ十ヲ擊ツハレ百ヲ、莫クレ善キハ於險ヨリ、以テレ千ヲ擊ツハレ萬ヲ、

莫シトレ善キハ於阻ヨリ。今有リ少卒一、卒カニ起リテ擊ニ金鳴鼓スレバ於厄路

ニ、雖モレ有リト大衆一、莫シレ不ルコト驚動セ。故ニ曰ク用フルレ衆キヲ者ハ務メレ易ヲ、用フルレ少キヲ者ハ務ムトレ隘ヲ。 (『呉子』 第5応変2) 易は平地、隘は狭い地形。

19 丁表 「畢竟魚兔ヲ得ルノ筌蹄ナレバ」

筌ハ者所ニ以ナリ在ルレ魚ヲ得テ魚ヲ而忘ル筌ヲ。蹄ハ者所ニ以ナリ在ルレ兔ヲ得テ兔ヲ而忘ル筌ヲ。言ハ者所ニ以ナリ在ルレ意ヲ得テ意ヲ而忘ル言ヲ。

吾レ安シ得テ二夫ノ忘言之人ヲ、而興レ之言ハシヤ哉。 (『莊子』 雜篇 26 外物)

筌は築、蹄は兔罝。徂徠の漢文語法書に『訳文筌蹄』がある。次項参照。

19 丁裏 「口耳不レ用心ト與レ目謀思テ之又思フ神其通センレ之ニ」

筌カ乎、筌カ乎。獲テ魚ヲ舍ス筌ヲ。口耳不レ用、心ト與レ目謀ル。思ヒテ之ヲ又思フ神其通センレ之ヲ。則詩書禮樂、中國ノ之言、吾將ニ聽クニ之ヲ以セント一レ目ヲ。則彼トシレ彼ヲ吾トシレ吾ヲ、有トシレ有ヲ無トシレ無ヲ、直道以行ハレ之ヲ、可シ以ハ咸ク被シム諸ヲ橫モ目ノ之民ニ。則可シ以通ス天下ノ之志ヲ。 (『徂徠先

生學則』 學則一) 直道は正道、横目之民は人民の意 (『莊子』)。

20 丁裏 「然レトモ而趙之地不シテ歲ニ危ラ而民不ニ歲ニ死セ而シテ魏之」

地ニ歲ニ危シテ而民歲ニ死スル者何也 (魏策)

孟嘗君之キレ趙ニ謂ヒテ趙王ニ曰ク、文愿ハク借リ兵ヲ以テ救ハレ魏ヲ。」

趙王曰ク、寡人不レ能ハ。孟嘗君曰ク、夫レ敢テ借ル兵ヲ者、以テ忠ナ」

21 丁表 「而今ニ而後吾知レ免ニ夫語」

曾子有リ疾。召シテ門弟子ヲ曰ク、啓ケ予ガ足ヲ、啓ケ予ガ手ヲ。詩

云ク、戰戰兢兢、如クレ臨カ深淵ニ、如シレ履ム薄冰。而今而後、吾知ル免ニ夫、小子。 (『論語』 泰伯) 臨終の曾子が弟子たちに對して、

ラントスルヲ王ニ也。」王曰ク、「可キレ得レ聞ク乎。」孟嘗君曰ク、「夫レ趙之兵、

非ズ能ク強キニ於魏之兵ヨリ、魏之兵非ズ能ク弱キニ於趙ヨリ也。然レドモ

而趙之地不シテ歲ニ危ウカラ、而民不ルニ歲ニ死セ、而魏之地歲ニ危ウクシテ、

而民歲ニ死スルハ者何ゾ也。以テ三其ノ西ニ爲ル趙ノ蔽ヘイ也。今趙不バレ救ハ

魏ヲ、魏敵盟セ於秦ニ。是レ與ニ強秦一爲ス界ヲ也。地モ亦且ニ歲ニ危ウカラント一、民モ亦且ニ歲ニ死セント矣。此レ文之所ニ以ナリ忠ナラントスル於大王ニ一也。」趙王許諾シ、爲ニ起ス兵十萬、車三百乘ヲ。 (『戰國策』 卷24 魏策)

下) 蔽は壅蔽するもの。敵盟は犠牲の血を歃スズて盟約すること。

20 丁裏 「談者有ニ悖テ於レ目而拂ヒ於レ耳謬テ於レ心而便ナル於レ身

者ニ或ハ有ニ悅シ於レ目而順シ於レ耳快シ於レ心而毀シ於レ行者ニ (非有ニ論)

於レ戲、可ナラン乎哉。可ナラン乎哉。談スルコト何ソ容易ナラ。夫レ談ハ者、有リ下) 悖リ

於レ目ニ而佛リ於レ耳ニ、謬ヒテ於レ心ニ而便ナル於レ身ニ者上。或イハ有リ下)

說シテ於レ目ニ順ヒ於レ耳ニ、快クシテ於レ心ニ而毀ル於レ行ヒ者上。非ズン

バレ有ルニ明王聖主、孰カ能ク聽カンレ之ヲ。 (東方曼倩〔東方朔〕「非有先生

論」、『文選』卷51)

かつて「身體髮膚、受クニ之ヲ父母ニ。不ルハニ敢ヘテ毀傷セ、孝之始メ也。」（『孝經』）と孔子から伝えられた教えを守つたことを示したという話。

「戰戰兢兢」以下は『詩經』小雅「小旻」の詩。

21 丁表 「禮煩ナル則ハ乱ル事ルモ神ニ則難シ説」
禮煩シケレバ 則チ亂ル。事フルコトレ神ニ則チ難シ。〔『書經』説命下〕

21 丁表 「君子不レ重則ハ不レ威學モ則不レ固カラ論語」

子曰ク、君子不レ重カラ則チ不レ威アラ、學バ則チ不レ固ナラ。主トシニ忠信ヲ、無カレレ友トスルコトニ不ルレ如カレ己ニ者ヲ。過テバ則チ勿レ憚ルコトレ改ムル。〔『論語』学而〕 固は「意必固我」（『論語』子罕）の一つ。頑迷固陋。

21 丁表 「實熟スル則ハ剥シ則辱ス莊」

夫ノ相梨 橘柚 果蓏之屬ハ、實熟スレバ 則チ剥カレ則チ辱メラル、大枝ハ折ラレ、小枝ハ泄ラサル。此レ以テ其ノ能ヲ「苦ムル」ニ其ノ生ヲ者也。故ニ不シテレ終ニ其ノ天年ヲ、而中道ニシテ天スルハ、自ラ「掊」ニ擊セラル、於世俗ニ者也。物トシテ莫シレ不ル

ハ若クナルハ「是」。〔『莊子』内篇 4人間世〕 相は榦、草木瓜。果蓏は木の実と草の実。掊擊は攻撃。

21 丁裏 「關石和鈞王府ニ則有リ五子之歌」

明明ナル我ガ祖ハ、萬邦之君。有リ典有リレ則、貽セリ「厥ノ子孫ニ。關シレ石ヲ和レ鈞ヲ、王府ニ則チ有リ。荒ミニ墜シテ厥緒ヲ、覆シレ宗ヲ絶ツレ祀リ。〔『書經』夏書「五子之歌」〕 夏王太康の放逸を弟五人が嘆き諫めた歌。

我祖は大禹。石は百二十斤、鈞は三十斤で、五權（銖兩斤鈞右）の最も重いものを指す。度量衡の細目まで統一して軽重異同を無くしたことを頌える。「則」は語勢を整える働きか。

21 丁裏 「今是大鳥獸則失ハ其ノ群匹ヲ越レ月ヲ踰テモレ時焉則必反巡シ過ニ其故郷ヲ云々 三年問」

凡ソ生ズル「天地之間」者、有ル「血氣」之屬ハ、必ズ有リレ知。有ルレ知之屬ハ、莫シレ不ルレ知レ愛スルコトニ「其ノ類」。今是レ大鳥獸、則チ失ニ喪スレバ「其ノ群」有ル「血氣」之屬者、莫シレ知ル「下」於人ヨリ、故ニ人ノ於ケルヤニ「其ノ親」也、至ルマテ死ニ不レ窮キ。〔『礼記』三年問〕 哽噍之頃は、せわしなく啼いて首を項垂れること。

21 丁裏 「何ソ可シニ而モ適ス乎 亀策傳コレ渴テ而一ノト云ト同語勢ナレトモ可而ノ例ハスクナシ又倭讀ニテハ同様ニヨマレズ」
罔ハ有レドモレ所レ數ナル、亦有リレ所レ疎ナル。人ハ有レドモレ所レ貴キ、亦有リレ所レ不如カ。何ソ可ケンニ而適ス乎、物安クニ可ケンニ全カル乎。〔『史記』68 亀策列傳〕 數は密の意。

21 丁裏 「故言フ而非ヲレ命者ハ有ニ六蔽焉尔」
辨命論コレモ辞ヲユルメテ音讀スル寸ハ得而モ可而モ言而モ語法ハ異ナラズ和訓トナス時大ニ別ナル様ニオモハルナリ

故ニ言ヒテ而非ズタルモニレ命ニ有ルニ六蔽一焉爾。（劉孝標「辨命論」首并序）、『文選』卷53）蔽は誤りの意。

21 丁裏 「家有レハ二千里一驥而モ不レ珍トセ焉」 云々

夫レ文章之難キハ、非ザルニ獨リ今ノミニ也。古之君子モ、猶ホ亦病メリレ諸。家、有レバ二千里一、驥モ而不レ珍トセ焉。人、懷ケバ、盈尺ヲ、和氏モ無シレ貴キコト矣。（曹子建「曹植」、『文選』第41）驥（『呂氏春秋』21開春論）は駿馬。盈尺は一尺余りの玉。和氏之璧（『韓非子』和氏）の故事を踏まえる。

22 丁表 「斲シテニ乎而人ノ善スルヲ一レ之ヲ斲ニ乎而人ノ不一レ善レ之ヲ」
内直キ者ハ、與レ天爲リ徒。與レ天爲ル徒者ハ、知ル天子ト之與レ己、皆天之所ナルヲ一レ子トスル。而ル獨リ以テニ己レノ言ヲ、斲メンニ乎而人ノ善セントヲ一レ之ヲ、斲メンニ乎而人ノ不ランコトヲ一レ善セレ之ヲ邪。（『莊子』内篇4人間世）斲は求人の毀誉褒貶に左右されない意を分節して述べた句法か。

22 丁裏 「不ニ我ヲ遐棄セ一レ不レ患ニ權之我ニ偏ルヲ一ノ類」

「不ニ我ヲ遐棄セ」は「既ニ見ル君子ヲ。不ニ我ヲ遐棄セ。」（『詩經』周南「汝墳」）君子は夫、遐棄は捨て置くこと。「人莫ニ之ヲ知ニ」は「憂ヒ來タリテ無シレ方、人莫シニ之ヲ知ル。」（曹丕「善哉行」、『玉台新詠』『文選』樂府）「推シ誠信ノ士ヲ、不レ恤ヘ人之我ヲ欺ク。量ニ能授ノ器ヲ、不レ患ヘ權之我ニ逼セ。」（陸機「弁亡論」、『吳志』卷48）

23 丁表 「論語ノ非シニ夫ノ人之為ニ一レ慟ヲ而誰ニ為ノ為ノ字オモシ必シモテニ夫ノ人之爲ニ慟スルニ而誰カ爲ニゼン。（『論語』先進）「爲め」よりも「爲す」の方がよい。

23 丁表 「荀子ノ文王之為レ子」

吾語ランレ汝。我ハ文王之爲リ子、武王之爲リ弟、成王之爲リ叔父。吾於ニ天下ニ、不レ賤シカラ矣。（『荀子』33堯問）吾は周公、汝は子の伯禽。

23 丁表 「不祥莫レ大ナルハ焉ヨリハ正法ナリ」 孟子 莫ニ不祥大ナルハレ焉ヨリ

ハ奇法ナリ 傳左
古者ハ易子ヲ而教フ之ヲ。父子之間ハ、不レ責メレ善ヲ。責ムレバ、善ヲ則チ離ル。離ルベ則チ不祥莫レ大ナルハ焉ヨリ。（『孟子』7離婁上）／善人ハ國之主也。王子相トシ楚國ニ、將ニ善ヲ是レ邦殖セント一而虐グルハレ之ヲ、是レ禍スル國也。且ツ司馬ハ令尹之偏ニシテ而王之四體也。絶チ民之主ヲ、去リニ身之偏ヲ、艾リテニ王之體ヲ、以テ禍ス其ノ國ニ、無シ不祥大ナルハレ焉ヨリ。（『春秋左氏傳』襄公三十年）楚公の王子熊圍（半圍）が大司馬の薦掩を殺した事件について非難した文章。邦殖は養い育てる意。偏は半身輔佐。四體は手足。

23 丁表 「竊ニ為ニ先生ノ不レ取也トアルベキヲ」 云々
今先生、率然トシテ高擧シ、遠ク集リニ吳地ニ、將ニ以テ輔ケント一レ治ヲ。寡人誠

二竊^{ひそ}嘉^{よみ}之^ヲ、體^ハ不^レ安^シ、席^ニ食^ハ不^レ甘^シ、味^ハビ^ヲ、目^ハ不^レ視^ニ靡^曼
之色^ヲ、耳^ハ不^レ聽^カ、鐘鼓之音^ヲ、虛^シ心^ヲ定^メ、志^ヲ、欲^{スル}聞^{カント}、流^シ
議^ヲ者、三^ニ年^{ナリ}於茲^ニ矣。今先生、進^シテハ無^ク以^テ輔^ク、治^ヲ、退^イテハ
不^レ揚^ゲ、主^ノ譽^レ。竊^{カニ}爲^{メニ}「先生」不^ルレ取^ラ也。『文選』全积漢文大
系 31 集英社 一九七六） → 出典は 20 丁裏前出。靡曼は美色。流議は余論。

『文選正文』では「竊^{カニ}不^ル下^ヲ爲^{メニ}「先生」取^ラ上^也。」としている。

23 丁裏 「山^ノ者^ハ不^レ使^レ居^レ川^ニ不^レ使^ミ渚^ノ者^ヲシテ居^ニ中原^ニ」^礼

故^ニ聖王^ノ所^ニ以^ハ順^{ナル}、山^{ナル}者^ハ不^レ使^レ居^ラ、不^レバ^レ使^メ三^ノ渚^{ナル}者^ヲ

（『尚書』周書・金縢） 二公は太公望と召公奭を指す。周公は凶兆の出
ることを虞れ、高さを同じくした三先王の土壇と自身を身代わりとする
祈りの壇を築かせた。これも「周公北面^{シテ}立^{テリ}焉。」が正法となる。

23 丁裏 「子能必使^シ來年^ニ秦^ヲシテ之^ヲ不^レ復攻^レ我^ヲ乎[。]」^{平原}

（趙）王曰^ク、請^フ聽^キ子^ノ割^{カム}矣。子能^ク必^ス使^メ來年^ニ秦^ヲシテ之^ヲ不^レ復
攻^メ我^ヲ乎[。]（『史記』平原君、列傳）

23 丁裏 「素^{ヨリ}悍勇而輕^シ齊^ヲ齊^ヲ號^シ為^レ怯^ト」^{孫吳}

傳

彼^ノ三^ノ晉之兵^ハ、素^{ヨリ}悍勇^{シテ}而輕^シ齊^ヲ、齊^ヲ號^シ為^スレ怯^ト。（『史記』孫

子吳起、列傳） 三晉は韓、魏、趙。

23 丁裏 「此^レ子^ニ者^皆出^シ吾下^ニ」^同

魏置^{キテ}相^ヲ、相^{トス}「田文」。吳起不^レ悅^バ。謂^{ヒテ}「田文」曰^ク、請^フ與^レ子

殷の十九代。初代湯王の都^亳（商殷）に都を定め、民政を安定させたといわれる。奠厥攸は奠都。正厥位は身分の制度化。曰以下は人民への詔。建大命は使命を果たし、人民の務めをなすこと。協比は徒党を組む意。『初學文談』本文は、「告^グ朕^ガ志^ヲ于^爾百姓^ニ。」の語序を顛倒した奇法であるという意。なお、13 丁裏世説新語の注を参照。

23 丁裏 「北面^{シテ}周公立^リ焉」^{金縢}

既^ニ克^ツレ商^ニ二年、王有^ツレ疾弗^レ豫^バ。二公曰^ク、我其^レ爲^ニ王^ノ穆^ニトセ
周公曰^ク、未^ダレ可^{カラ}、以^テ戚^{シム}我^ガ先王^ヲ。公乃^チ自^ラ以^テ爲^シレ功^ヲ、
爲^リ三^ノ壇^ヲ同^ジクシ^レ壇^ヲ、爲^ツ二^ノ壇^ヲ於^ニ南方^ニ、北面^{シテ}周公立^{テリ}焉。

（『尚書』周書・金縢） 二公は太公望と召公奭を指す。周公は凶兆の出

ることを虞れ、高さを同じくした三先王の土壇と自身を身代わりとする
祈りの壇を築かせた。これも「周公北面^{シテ}立^{テリ}焉。」が正法となる。

むか「、韓趙賓從セシムル「ハ子孰ニ與レゾ起ニ」。文曰々不レ如カレ子ニ起曰々、此レ子ニツノ者皆出ヅ「吾ガ下ニ」。而シテ位加ハルハ「吾ガ上ニ」、何ゾ也。（同前）孰與は「どちらがよいか（後者の方がよいではないか）」の意。

24 丁表 「渴ノレ無「ヲ（下略）」→前出（13 丁裏）

24 丁表 「王之學レ華ヲ皆是形骸之外去「ト之所ニ以更ニ遠キ」同

李卓吾批点『世説新語補』には、徳行篇第12話に当たるはずのこの章段が無い。『中国古小説集』（世界文学大系71 筑摩書房 一九六四）は金沢文庫本（尊經閣本）、四部叢刊本、王氏〔王先謙〕思賢講舍本（上海古籍出版社 一九八二）等に依つていて、この章段を載せている。『世説新語補』では、どの刊本が対応するか。筑摩の大系は現代語訳なので、思賢講舍版から引用する。「王朗每ニ以テ識度ヲ推スニ華歆ヲ」。歆蜡曰「嘗テ集メテ子姪ヲ燕飲ス。王モ亦學ブレ之ヲ。有リ人向ヒテ張華ニ説ク此ノ事ヲ」。張曰ク、王之學ブハレ華ヲ、皆是レ形骸之外ニ去ルコト之所ニ以ナリ更ニ遠キ」。

蜡日は年越しの祭。形骸は外形だけのもの。

24 丁表 「吾有ニ羊上林ノ中ニ平隼」

初メ（ト）式不レ願ハ爲ルヲ郎ト。上曰々吾有スニ羊ヲ上林ノ中ニ欲レ令メントニ子ヲシテ牧セレ之ヲ。式乃チ拜シテ爲ルレ郎ト。布衣屬ニシテ而牧スレ羊ヲ。歲餘ニシテ羊肥息ス。上過リテ見ニ其ノ羊ヲ、善レ之ヲ。式曰ク、非ザルニ獨リ羊ノミ一也。治ムルモレ民ヲ亦猶ホキレ是ノ也。以テ時ヲ起居セシメ、惡シキ者ハ輒チ斥ケ

去リ、母カレレ令ムルコトレ敗ラレ羣ヲ上以テ式ヲ爲シレ奇ト、拜シテ爲シテ緯氏ノ令ト「試ムレ之ヲ。緯氏便トスレ之ヲ。遷シテ爲ス「成臯ノ令ト」。將漕最タリ。上以爲ラク、式朴忠ナリト。拜シテ爲ス「齊王ノ太傅ト」。（『史記』平準書）郎は役人、令は長官。布衣は綿服。屬は麻製の履。草鞋ともいわれる。將漕は運漕を率領すること。太傅は輔佐役。

24 丁裏 「夫如ナレハレ是ノ也為レ物甚衆ク為レ己甚寡シ」運命論本文ニ就夫如クナレバレ是クノ也、爲ルハレ物甚ダ衆ク、爲ルハレ己甚ダ寡シ。（『文選』卷53、李蕭遠〔李康〕「運命論一首」）耳目心意を娯ませるものは世間にいくらでもあるが、わがものにできるものはいくらもないという文脈。

24 丁裏 「咫尺之内便覺ニ萬里為「ヲ」レ遙説

これも『世説新語補』注記からの引用か。『参考』「幼クシテ好ミレ學ヲ有リニ文才一、能クシテ書ヲ善クスレ畫ヲ。於ニ扇上ニ圖クニ山水ヲ。咫尺之内、便覺ニ萬里為ルヲ」（『南史』齊武帝諸子伝）

25 丁表 「夏小正ニ鷹則為レ鳩トノ下ニトイヘリ」

鷹則爲ル鳩ト。鷹ナル也ハ者、其ノ殺ス之時也。鳩ナル也ハ者非ザルニ其ノ殺ス之時ニ也。善ク變ジテ而之ク仁ニ也。故ニ其ノ言フヤレ之ヲ也、曰フ則ト。盡クスニ其ノ辭ヲ也。鳩爲ルハ鷹ト、變ジテ而之ク不仁ニ也。故ニ不ルレ盡サニ其ノ辭ヲ也。（『大戴礼記』夏小正・一月）「故其言レ之ヲ也」は通解「故其言レ之ヲ也」に作る。「鷹爲鳩」が「則」一字でその順当な変化である含

意を示すことになるという。

25 丁裏 「春秋僖十六年隕石アリ于レ宋五ツ」

十有六年、春、王正月戊申朔、隕石アリ于宋ニ、五ツ。是ノ月、六鷁退飛シテ過グ二宋ノ都ヲ。鷁は水鳥の名。天子の乗る舟の舳先をこの鳥で象り、「鷁首」と呼ぶ。退飛するとは、疾風のために後ずさりして飛ぶ意というが、時人が凶兆と見做したものと解釈されている。『後漢書』天文下にも引く。『漢書』五行志下には「釐公十六年」とする。釐公は『史記』の表記で僖公に同じ。

25 丁裏 「公羊傳「曷為先言隕而後言石隕石記スレ聞タニ其ノ」

礪然タルヲ「視之則石察之則五」
曷為レゾ先ニ言ヒ隕ヲ而後ニ言フ石ヲ。隕石ハ記スレ聞クトコロヲ。聞キニ其ノ嗔然タルヲ、視レバ之ヲ則チ石ニシテ、察レバ之ヲ則チ五ナリ。(略)曷為レゾ先ニ言ヒ而後ニ言フ鷁ナリ。徐口ニ而察レバ之ヲ則チ退キ飛ブ。五石六鷁トハ、何以テ察レバ之ヲ則チ鷁ナリ。六鷁退飛ストハ、記セルレ見ルトコロ也。視レバ之ヲ則チ六ニシテ、而後ニ言フ鷁ヲ。六鷁退飛ストハ、記セルレ見ルトコロ也。視レバ之ヲ則チ六ニシテ、者何ゾ也。鄉トスルニ其ノ居ヲ一也。鷁以テニ北方ヲ一爲スレ居ト。何ヲ以テ謂テレ之ヲ、而後ニ言フ鷁ナリ。外異ハ不ルニ書ヤ、此レハ何以テ書セル。為レバニ王者之後書セル。記セルレ異ヲ也。王正月の「王」は周曆に従う意で、春の初めの月の頭に記セレ異ヲ也。王正月の「王」は周曆に従う意で、春の初めの月の頭に記すという。嘵然は怒る様。怒号に似た爆音の意か。視察は目を留めてよく見る意。異は異変、災異。

25 丁裏 「左傳注二莊ノ七年ニ星隕テ如雨フル見ニ星之隕テ而墜ルヲレ於二」

四遠ニ云々

隕ハ落也。聞キテニ其ノ隕ツルヲ視レバ之ヲ、石ナリ。數フレバ之ヲ五アリ。各々隨ヒテ

ニ其ノ聞見ノ先後ニ而記スレ之ヲ。莊ノ七年ニ星隕チテ如シレ雨フルガ。見レバ三星之隕チテ、而隊ツルヲ於四遠ニ、若シクハ山若シクハ水、不レ見ニ在ルノレ地ニ之驗ヲ。此ハ則チ見テニ在ルノレ地之驗ヲ、而不レ見ニ始メ隕ツル之星ヲ。史各々據リテレ事ニ而書る。(『春秋左氏傳』僖公十六年注) 経文割注。「莊ノ七年ニ云々は「夏四月辛卯、夜恒星ヲ不レ見、夜中星隕ツルコト如シレ雨フルガ。」(『春秋左氏傳』莊公七年)

26 丁表 「夏小正ニ正月ニ……」「九月ニ……」

正月、啓クレ蟄ヲ。「傳」言フコロハ始テ發クレ蟄ヲ也。鷁北郷。〔傳〕先ニ言ヒテレ鷁ヲ而後ニ言フレ郷ヲ者何ゾ也。見テレ鷁ヲ而後ニ數レバニ其ノ郷ヲ一也。郷トハ者何ゾ也。郷トスルニ其ノ居ヲ一也。鷁以テニ北方ヲ一爲スレ居ト。何ヲ以テ謂テレ之ヲ、而後ニ言フ鷁ナリ。九月遷鷁アリ。先ニ言ヒレ遷クヲ而後ニ言フハ鷁鷁ヲ一何ゾ也。見テレ遷クヲ而後ニ數レバ之ヲ則チ鷁鷁也。何ゾ不ルレ謂ハニ南ニ鷁鷁ヲ一何ゾ也。見テレ遷クヲ而後ニ數レバ之ヲ則チ鷁鷁也。何ゾ不ルレ謂ハニ南ニ郷ヲ一也。曰ク、非ザレバナリニ其ノ居ニ。故ニ不レ謂ハニ南ニ郷ヲ一、記スレ鷁鷁之遷クヲ也。如キハレ不ルガレ記サニ其ノ郷ヲ一何ゾ也。曰ク、鷁ハ不ルニ必ズシモ當ラニ正ノ之クニ一者ナレバ也。(『大戴礼記』47 夏小正) 夏小正是夏代の農事暦。蟄は虫が隠れ棲むこと。

26 丁表 「降セン矣哉終ニ身ヲ夷狄ニ戰フ矣哉骨暴サンニ沙礫ニ」

鼓衰ハテ兮力盡キ、矢竭シテ兮絃絕シ、白刃交ツテ兮寶刀析レ、兩軍蹙ツテ兮

生死決ス降ランカ矣哉、終エンド身ヲ夷狄イエテキ、戰ハシカ矣哉、骨ヲ暴サン沙礫ヲ。

（李華「吊フ吉戰場ヲ文」、『続文章軌範』卷3、『古文真寶後集』下）

26 丁表 「魚行ハ水濁リ鳥飛ハ落ツレ毛」

垂示ス云ク、魚行ゲバ水濁リ、鳥飛バ毛落ツ。明ラカニ辨ジ主賓ヲ、洞ラカニ分カツ

二緇素ヲ。直ニ似タリ當台ノ明鏡、掌内ノ明珠ニ。漢現シテ胡來リ、聲彰ハレ色

顯ハル。且ク道ハ爲什麼カ如クナル此クノ。試ミ舉ス看ヨ。〔下略〕（『碧巖錄』第29

則）緇素は黑白。爲什麼は何故。舉す以下の提唱は省略。なお、「夾山

圓悟禪師克勤和尚、頌古に云ク、『魚行ゲバ水濁リ、鳥飛バ毛落ツ。至鑑難

クレ逃ハ太ダ寥廓タリ。一往迢迢テウテウ五百生、只緣ヨ因果ニ大修行ス。

疾雷破リ山ヲ風震ハス海ヲ、百鍊ノ精金色不レ改マ。』この頃なほ撥無因果

のおもむきあり、さらに常見のおもむきあり。』（『正法眼藏』7深信因果）

28 丁表 「東坡ノ與ル黄魯直ニ書ニ凡人文字當シ三務テ使ニ平和ナラ」

至足之餘溢テ為ニ恠奇ト一蓋出ル於レ不レ得レ已ハ也トイヘリ」

某啟ス。晁君ノ騷詞、細カニ看ル甚ダ奇麗ナリ。信ニ其ノ家多キ異材一耶。然レ

ドモ有リ少意一。欲ス下レ魯直ニ以テ己ガ意ヲ微箴セント上レ之ヲ。凡ソ人ノ文字、

當ニ三務メテ使ム平和ナラ。至足之餘、溢シテ為ル怪奇ト。蓋シ出ヅル於ニ

不ルニ一レ得レ已ムコトヲ也。晁文ノ奇麗似タリ差ヤ早キニ。然レドモ不レ可カラ直

ナルのみ云ル。非ズ謂フニ避ケヨト譯ヲ也。恐ラクハ傷ツケン其ノ遇往之氣ヲ。當ニ

下ニ朋友ノ講磨之語乃チ宜シカル。不レ知ラニ以テ為スヤレ然リト否ヤヲ。不

宣。『蘇軾文集』卷52）魯直は黃庭堅の字。晁君は黃庭堅（黃山谷）と

共に蘇門四學士（他に張耒、秦觀）と称された晁輔之の叔父晁載之。劭博（あは）

〔宋〕『劭氏聞見後錄』卷14に黃庭堅が晁の「閔レム吾ガ廬ヲ賦」につ

いて蘇軾の意見を求めたのに答えた書とある。騷詞は辭賦の文章。騷は

離騷に由来し風流韻事を指すようになつた。騷人、騷客は詩人の意。不

宣は手紙の結語。不一木尽ニ同じ。同書にはまた「蓋シ出ヅル于ニ子不ルニレ

得レ已ハコトヲ耳。晁君ハ喜ブレ奇ヲ太ダ似タリ早キ」とある。そして「此レ文

章ノ妙訣、學者不レ可カラレ不ルレ知ラ。」とする。

28 丁裏 「其ノ為リ人也溫柔敦厚ナルハ詩ニ教ル也トアリ」

孔子曰ク、入リテ其ノ國ニ其ノ教可キレ知ル也。其ノ爲リ人ト也、溫柔敦厚ナル

詩ノ教也。疏通知遠ナルハ書ノ教也。廣博易良ナルハ樂ノ教也。〔下略〕（『禮記』

26 經解）

30 丁裏 「閨雎ハ哀而不レ傷樂而不レ淫トノ玉ヘルモコノ意味ナリ」

子曰ク、關雎ハ樂ミテ而不レ淫セ。哀シミテ而不レ傷ラ。〔論語〕八佾

31 丁表 「詩ハ性情ヲ述ル者也ト古ヨリイフ「ナリ」

曰ク、吾聞ク之ヲ。凡ソ詩之所謂風ト者、多ク出デテ於里巷歌謡之作ヨリ、

所謂男女相與とも詠歌シ各ミ言フ其ノ情ヲ者也。惟ダ周南召南之ミ、親シク被

リニ文王之化ヲ以テ成シレ德ヲ、而人皆有リ三以テ得ル其ノ性情之正シキ。故

「其ノ發スル於言ニ者、樂シミテ而不レ過ギ於淫ニ、哀シミテ而不レ及ニ於傷ルルニ。是ヲ以テ一篇獨リ爲ス「風詩之正經ト」。自リシテ「抑風而下ハ」則チ其ノ國之治亂不レ同ジカラ、人之賢否亦タ異ナリ、其所ノ感ジテ而發スル者、有リ矣。（朱熹『詩經集伝序』）

32 丁表 「詩三百一言以蔽之」^{サタム}曰思無レ邪トノ玉ヘル

子曰ク、詩三百、一言以蔽之^{おほ}、曰ク思ヒ無シレ邪。（「論語」爲政）蔽

三百は『詩經』の別称。

34 丁表 「盛唐之格格ノ高似梅花等ノ語ミルベシ」↓次々注

34 丁裏 「調ハレ和合也又揉伏也ト注ス」

「調」を『説文解字』に「和合也。」、『韻會』に「揉伏也。」と釈す。

35 丁表 「古人ノ詩評採菊東篱下ヲ格高シトイヒ」^{じうぶく}云々

予每ニレ詩ヲ、以テ陶淵明韓杜ノ諸公ヲ皆為ス「韻勝ルト」。一日見^{まみ}「林倅」^{りんさき}於徑山ニ、夜話及ブ此。林倅曰ク、詩ニ有リレ格有リレ韻、故ニ自

ラ不レ同ジカラ。如キハ「淵明ノ詩」是レ其ノ格高ク、謝靈運ノ池塘春草之句ハ乃チ其ノ韻勝ル也。格ノ高キハ似梅花ニ、韻ノ勝ルハ似ルト海棠ノ花ニ。予時ニ聽キレ

之ヲ、覺然トシテ若シレ有ルモノレ所レ悟ル。自リ此讀ムコトレ詩頓ニ進ミ便チ覺

エ「兩眼如クナルヲ」レ月々、盡^{ことごと}見ル古人ノ旨趣ヲ。然レバ恐ル前輩或ハ有ルヲ

「未ダルトヨレ聞カ。（「詩有格高有韻勝」、「宋」陳善『捫風新話』）」豐然は翻然として目を瞠る貌。捫風は人前で風を捻り潰す底の無礼な振舞い。

35 丁表 「文徵明ハ以レ格ヲ勝レ王履吉ハ以レ韻ヲ勝ル」

文徵明（衡山）主寵（履吉）は明の書家・画家。本文の出典は未詳。江戸中期の絵師伊藤若冲の画号は大典が「大盈若冲」（『老子』）からとつて与えたものといわれる。『小雲棲稿』卷八（小雲棲は大典の号の一）には「藤景和画記」（景和は若冲の字）という若冲の評伝が載るという。明の文人画家たちの知識もこうした交際の中で深められたか。

36 丁裏 「文章軌範放膽小心ノ一科ヲ立タリ」

大凡學^{おほよそ}文^マ、初メハ要シ^{たん}膽^マ大ナランコトヲ、終リハ要ス^マ心^マ小ナランコトヲ。由リ麤^{よそ}入リ細^マ、由リ俗入リ雅^マ、由リ繁入リ簡^マ、由リ豪蕩^マ入ル^マ純粹^ニ。（『文章軌範』1候字集 放膽文序）「麤」は「粗」。

36 丁裏 「王元美ノ論ニ文章ノ枕竅不レ過ニ放膽小心ノ二端ニ何也文非ハ小心ニ識弗レ沈ナラ也非ハ放膽ニ氣弗レ壯ナラ也知ニ放膽小心之說ヲ」^{とみ}則^ハ文章家思過^ハ半^ニ矣トイヘリ」

出典未詳。王元美は王世貞。李元美（李攀龍）と並称され、徂徠を始め古文辞学派に推戴された。

【補足】

各種テキストの確認に当たつては、『漢文大系』や各種版本になるべく当たるようになつたが、時間等の制約から Web 資料にも多く頼つた。次のウブサイトなどから恩恵を蒙つた。

国立図書館のデジタルアーカイブ（電子書庫） <http://www.ndl.go.jp/>
同館「近代トロジタル・ハイ・ワード」 <http://kindaindl.go.jp/>
早稲田大学「古典籍総合トータルベース」
<http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/>

中國哲學書電子化語彙

<http://ctext.org/zh/>

漢典

<http://www.zdic.net/>

Hathi Trust Digital Library

<http://www.hathitrust.org/>

Internet Archive

CiNii（国立情報学研究所）Books
<http://ci.nii.ac.jp/books/>

【附記】

1 翻刻本文・注記中の訓読漢文は、拙作「漢文エディタ」で入力し、HTML 形式で出力したものを MS Word に貼り付けたものがほとんどである。余白がまだ多少あるので、前号の紀要に書き切れなかつた「環境依存文字」の取り扱いについて補足すると、方法は二つある。

(一) 入力フォームにその文字を入力し、ボタンを使ってコリコリ 16 進文字実体参照にエンコードしておく。（例 漢→ੇ）ひとつあえが登録した後で各種変換時にエンコードする。ただし私は次の方法を勧める。

(2) そのまま登録した場合にはエラーメッセージが出るので、再度「？」

箇所に該当文字を打ち込み、訂正保存ボタンで保存すると、またエラー画面が出て VB エディタ画面になる。そのままマクロの実行を一旦停止し、再度入力フォームを起動するときに文字は入力されている。それから各種変換タブに移動する。Word に出力して、必要な文章に貼り付けた後、全体のフォントの大きさを変更するなどの変換を行へ。

※ いわゆる、現在の文字コード処理の制限により起り、私は、この操作の後、データをコピーし、環境依存文字を扱える「真魚（Manz）」[（http://www.vector.co.jp/soft/winnt/writing/se219008.html）](http://www.vector.co.jp/soft/winnt/writing/se219008.html)

等のエディタに貼り付け、再度エンコードを繰り返してプログラウザで表示し、Word に貼り付けてくる。（そのエディタにも VBS で作った自作マクロを割り当てる。WEB サイトで公開してくる。）大変面倒な手続きに見えるが、慣れれば一連の操作である。すべてを一括で変換できるものへな「漢文エディタ」ができたかと思ふ。

2

本稿では MS Word で左ルビを振つていふ。その方法を付記しておぐ。例えば「漢文」の右へにルビを振つた文字を選択し（またはその直前にカーソルを置く）SHIFT+F9を押す。フィールドコードが表示されるので、{EQ ¥* jc2 ¥* "Font:IPA 明朝" ¥* hps12 YoYad (¥s¥up 9 (かんぶん), 漢文) }（漢字は横書き）の「漢文」の後に、¥s¥do 9(かんぶん)の右へに補い、中の文字「かんぶん」に対し「かんぶん」と回し書式を適用し、もう一度 SHIFT+F9 を押せばよい。ほみだしの具合に応じて hps &up,do の後の数字を適宜修正しながら表示の具合を調整していく。ただし、フィールドコード自体を手入力で打つことはできない。部分を修正していくだけである。これいを自動で操作できる日本人向けのワープロがまだ無い。縦書きプログラウザが実用化すれば、あるいは HTML の新バージョン、もしくは CSS で対応可能になるかもしない。どれもまだ先の話である。